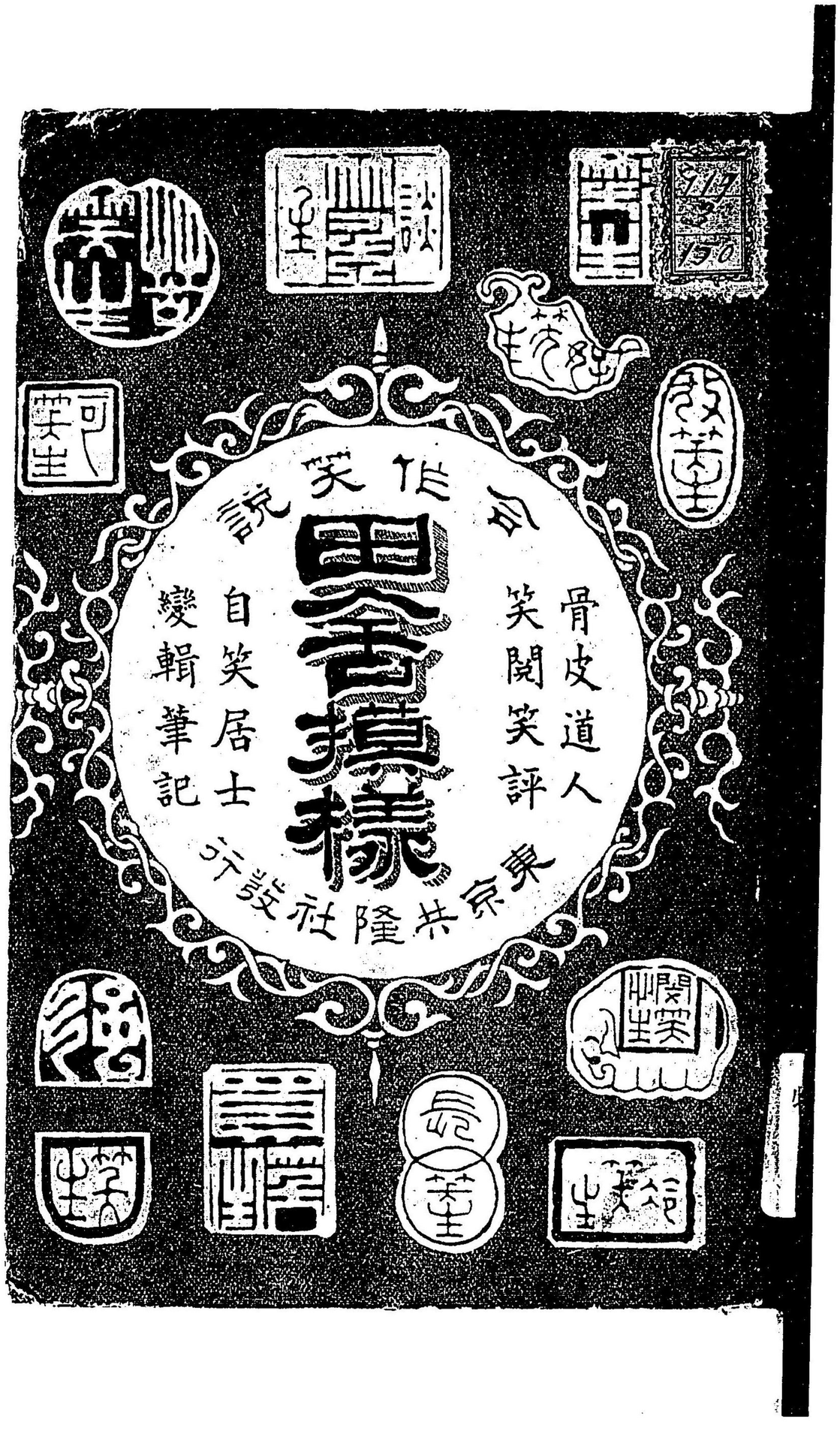


091576-000-3

特11-649

田舍摸樣

自笑居士／編

M22

DBO-0020

特11
649
W2-20980/22

帝國圖書館藏

合作笑説　田舍摸様の序

爰ま青錢一文あり其價を問べば僅に厘なり是を玉堀に以て餡を買ふに足ず然れども今豆を煎て以て燒芋を買ふべし以て彈むれば集合力の功能是に於て歟在り古人曰く三寸の珠の智ありと是れ亦前の青錢の理寄れば若又之を百個集むる時は握り貫べし以て鰻の丼をパクツクを得合に異からぎ女一人居れば苦世〳〵物案事し て夜を寐ぬ女房も三人寄れば姦〻くして井戸

端の會議もおツ初まり男一人居れば只惣菜を貰ツて莞爾のみかれぞも三四人集れば女郎買の相談も發起べし集合力の功能是は於てか在り是れ此合作笑説の思ひ附ある所以ある歟稿成は及んで自笑子惣代の資格を帶び來つて道人に校閲を屬し併せて評語を加へん事を需む道人受て之を見るに其趣向の飛離たる普通の小説と同ドから也恰も美人を丸裸体にし後より眺め錦を裏返して斷糸補綴の有様をホヂクり出したる者の如し而して其文章の孰れか

優孰れか劣あるやい道人はやパア些とも分りましねへらら敢て功拙を評する行司の役目も勤め難しと雖も各自其筆鋒を磨澄して窮處を突留め人をして一讀一笑二讀二嘆三讀三感四讀五尤も思はしむるの價ある所は慥に見届けたり故ゐ道人い其依頼を辭せずして棚の上ょ出鱈目を並べるに餘計ゐ手間潰しをせしも敢て何とも思はざるあり江湖の諸彦冀はくい此書を見て田舎の摸様ナウものア此様なもんりなアと御了知あらん事を

于時明治廿二年第九月中幹東京神田錦町第二の裏店に田舍饅頭を煩張かゝら

瘦々亭骨皮道人おるす

合作笑説

田舍摸樣目録

○察すべー書生の親心　微笑生稿
○笑ふべし芋堀の相談會　放笑生稿
○廢すべー御馳走の無理勸　好笑生稿
○感ずべー人足の改良説　談笑生稿
○務むべー身体の衛生　苦笑生稿
○思ふべし兒童の教育　可笑生稿

合作笑説 田舎摸様目録 終

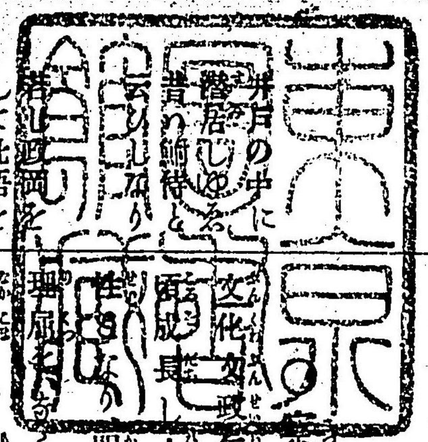
○憐むべし妄婚の結果　憫笑生稿
○聞べー花柳の情況　冷笑生稿
○改むべー猥褻の俗謠　强笑生稿
○備ふべー不時の金穀　長笑生稿
○見るべー珍敷祭禮　買笑生稿

合作笑説 田舎摸様

笑閲笑評　骨皮道人
變輯筆記　自笑居士

親心

微笑生稿



井戸の中に潛居しゆゑ文化文政年度とて、其名ハ大層立派でも、現今の文化と事かはり、其實ハ書生の親心を、べー書生の親心、井中に潛居で天を見る、狹き心の窮屈も所謂習ひ成長し人々ハ、井中に潛居で天を見る、狹き心の窮屈も所謂習ひ性となり開化の味を知らずして、舊弊頑固を合併し、手前勝手の屁理屈を、理屈ばかりならべて今ハ別社會、縱ひ頭ハ坊主でも、丸くあらない腹の中、困つた者と云ふものゝ、子を持つ人ハ又た格別、燒野に雉子夜の鶴、三千世界に子を愛す、親の心に差別なく、自分ハ素より頑固でも、息子ハ開化に養育んと、公債証書を杖に突き、學資を送る親の慈悲、

借若し出來ざれば死すとも歸へらず

質念より恥念を越へ苦念の後にあらざれば歸らざるべし

ろの厚恩に報ひんと、故郷を出る息子殿、學若し成らぬ其時は、死すとも還らぬ志し、人間到る處には、必らず青山あるべしと、月照もどきの假聲も、孔子の先見大當り、始めあれども終りなく、山芋うなぎに化ずして多年の辛苦泡と消ゆ、怠惰書生の親達は、傍で見る目も氣の毒なれ、

浮世をはなれて風流に、心を移せば老の身の、兎角我子の慕はしく寐ても寤ても指をり數へ、我身の老るに氣もつかず、息子の歸郷は何時ならん、國を出てより五年越し、もう卒業に間もあるまじ、今年か夫とも來年か、兎に角甲山氏が昨夜歸郷せしと聞けば面會して話しを聞かば、定めし委しき事の分るであらうと、妻を相手に語りつゝ、怠惰書生の両親が、案じ煩ふ折からに、格子戸がらりと入り來る甲山

江戸からの一言を聞て其頭に、髭あるを知る

若し郵便あらば届け先に困るなるべし

甲山　乙海さんは御在宅かナ

乙海　イヤ是は〳〵

是は〳〵の語は甚だ簡短なれども其中まは御機嫌よく、宜こそお出で、お珍らしい、あとの意を含蓄して居るあるべし。乙海は甲山に席を與へて

乙海　江戸のら度々の御紙面で實はその都度〳〵お返事も上んけりや濟んチウ事は知つて居りながら、どうもあア歳は取さうあいものので、此両三年前迄は未だ左までに大儀よも思はんぢやッたが、此頃はモウ一寸にも眼鏡が無けらにや目があつても目の役を仕ませんぢや、夫に何云ふものチャやら些細な字でも皆度忘れをして、此間も他所へ手紙を遣たら其手紙が判らんチウて先方から態々聞に來ましたぢやアハ、、、其樣な活智のあ

い老耄ぢやで、追々御無沙汰ましたぢや……サァ何ぞ胡坐に居て下さい嘸お草臥ぢやらう

甲山　御同様に歳をとると我ばかり強く成て身体の利んよゝ困りますぢや……今ゝ便利で何處から何處までも鐵道も出來るし蒸氣船も通ふて居るぢやで昔しの道中から思ふと樂あやうぢやが夫がサ歳を取と其便利あ氣車や蒸氣船に乗ても矢張り眩暉やら頭痛やらを催はして却ッて弱りますぢや……かう言葉にあまへる樣ぢやが少し御免を蒙つて足を出しませうのい

乙海　サァ何ぞお樂に……時に江戸からのお手紙でゝ御令息ゝ御病氣でゝ無かつたナウ事ぢやが何云ふ間違ひぢやッたやら尤も電信とやらゝヨウ掛つたと思ふても外れる事があるとか落る事があるとか日外も醫者と石屋と間違ふたとか壹岐を

自白

イヤ若い者でも隨分弱りますぢや

落る外れるとゝ電信違ひ

引取ると呼吸を引とると間違ふたとか聞きましたが矢張り其樣な間違ひでいも有りましたぢやらう……併し御病氣と思ひの外御無事あら重疊ぢや……ム、昨夜ゝ又た何よりか結構あお土産を頂戴して誠に有がたう彼ぢやァ却つて恐縮で……イヤ何時見ても江戸の國扇ゝ又た格別ぢや彼の俳優の似顔ゝ實よ立派ぢや彼の國十郎ナウあァ昔し權十郎ナウた俳優ぢやさうぢやが當節ゝ……

餘り重疊で……

此人よして此通言を吐くとゝ不思議

妻　所天、其樣あ無駄事ばのりお云ひ成さらんで早う怠助(息子の名あるべし)の事をお聞申して御覽ぢやイヨ

お察し申す

乙海　ム、爾ぢやッたどうも老耄ると何も角もへチャコチャに成て困るぢや……時に甲山さん御令息ゝ御病氣ぢや無ふて見ると定めし追々御上達ぢやらうゞ實に持べき者ゝ男子ぢや殊

デモあるまい

先づ頭を掻て然る後に答ふ

我子の事ハ暫く棚に置て云はず

に御令息ハ幼少から怜悧の御氣質で自家の息助あぢゝハ雲泥の違ひぢやで定めし今年ハ卒業ぢやらうと思ひまもが何月わたり御歸郷の樣子ぢやナ

我子の身の上を尋ねらるれバ心嬉しきが普通の親心あるに甲山ハ却ッて迷惑氣ある面持にて顔を顰めながら

甲山　お尋ねに預つて實に恥入る次第ぢやが彼の懶藏ハ迎もモウ役に立ませんぢや

乙海　ハテナ何で又たお役に立ちませんのぢやナ

甲山　然れバぢやお話し申すも何とやら閻夜の恥を白晝へ持出すやうぢやが一体愚息に限らず今の書生ハ昔しと違ふて大層驕奢て居るにハ實に驚きましたぢや尤も一樣にハ云はれませんけれど大体の處を取つまんでお話しすると斯ぢや……先づ

奢る平氣ハ久しからず

時計の傍に保險証ハ無かりしや

乙女の姿ひばち留めん

第一下宿の有樣を見ると大抵十人の中で八九人までハ一圓四五十錢位の一閑張の机を扣へて居り升ぢや夫かふ其上に立派な敷物を廣げて書籍ハ一冊も無ふても時計丈ハ箱に入てチョキ〳〵音をさせて居りますぢや又た偶にハ書籍が積であるのを見ますぢやが其の書籍が奇麗で居る處を見ると讀だのぢややら飾りに置てあるのヂャやら些ッとも知れませんぢや夫から膝の下にハ二枚續きの洋氈を敷て其傍に桐の小さな長火鉢を据て其火鉢の引出しを明て見ると婦人の寫眞と下宿屋の書附が這入て居りますぢやァハヽヽ夫に茶道具も大畧揃ふて居るし茶もマァ五六十錢位の品を呑で居りますぢや

乙海　お話しの中ぢやが其茶具ハ何程ほどの品を遣ふて居りますかナ

若し道人あら茶用で御坐ると洒落たい處

懸直なしの答辨

此答も笑札ウキ

甲山　左様ぢやッコまでい氣が附なんだが大抵勸工場の揃ひ道具ぢやから先づ廿五錢から五十錢位あものぢやらう

乙海　勸工場チウと……

甲山　勸工場チウあア先づ博覽會の小さあので早く云ふて見ると種々の商人が一所の處に寄合ふて正札で品物を賣る場處で御坐いますぢや

乙海　夫で勸工場チウ物い了解りましたが何でまた其勸工場の品物チウ事が知れましたぢやらう

甲山　夫いナ右の正札の張紙のある茶碗で茶を呑で居るものがあるので知れましたぢや

乙海　如何様なア……成ほど下宿屋に居つてさへ其様な洒落た事をする位あら定めし衣服なんぢも奢つた物を着て居りま

尤も着替の衣服い質庫の内に四枚（仕舞）あり

御尤も〳〵

すぢやらう

甲山　左様ぢや隨分奢つて居りますぢや其中でも醫者の書生が一番立派にして居る様子でマ、ア一寸した夏服でも上等で越後上布に博多の帶を締て其上に紹の羽織を着て居りますぢや……

……下等チウても銚子縮みに數寄屋の羽織位い着て居る者ぢやで其外の書生も見様見眞似で餘ほど体裁を作りますぢや……

……夫いマア何程奢つても立派な衣服を着ても學問さへ能ふ勉强さへすれバ何にも云ふ處いあいけれど例へて云へバ職人ぢやチウても美衣服を着て居つてい働らけん様あものぢで其様あ立派あ身形をして奢ッて居るやうでい迚も學問の修業い出來ませんぢや

乙海　シテ見ると愚息あども矢張り其仲間ぢやらうが實に困つ

兎に角の二字乙海に取ッてん胸に錐

人を怨むん親の慾

揚弓店より勉強して吉原に入り込しん至蕩の愕則を踏みしあり

たものぢや

甲山　何して御令息ん兎ょ角御勉強を成さる御様子ぢやが愚息の方ん遊ぶ事と口の先ばかう達者にあつたにん賈に慧きまし

たぢや夫ぢやで今度も下拙を欺して出京させた次第ぢやが其初めを聞て見ると同宿の書生に道樂の奴があつて其奴に釣り込まれたものと見えますぢや所謂朱に交はれバ赤くなるの譬の通り善事より惡い事ん覺え易いものぢやで其道樂の奴に誘はれて一日梅花亭とか何とか云ふ揚弓店の女に欺されたのが病つきで夫から吉原の何妓とか云ふ女郎に現を抜かし初めて他人が異見をして呉ても馬耳東風で相手ん扨かいで此方ばかりが夢我の夢中ぉ成て通ひ詰たのぢやが素より限りのある學資ぢやで爾いつまでも女郎も買ふて居れずト云ふて之を思ひ

窮進が一死の策略

聞だけ野暮あり

據ろなく答へるの有様

切る事も出來ずチウ處から西も東も行處〳〵に金を借て其上に下宿屋の拂ひも三四ケ月延滯して二進も三進もどうする事も出來ん處から大病と僞つて金を取に寄越た仕儀ぢやがナント呆れ返つたものでん有りませんかいナ

乙海　イヤお話しを聞バ聞くほど驚く事ばかりぢやが愚息ん何様ぉ様子でしたぢやらう

甲山　左様其事ぢや御令息ん愚息のやうな者でんぁい大根が才子ぢやが扨て才子は才子だけ何をしても人並よりか優れて出來る様子ぢやけれども才子チウ者ん兎角に其才を恃みにする者と見えて御令息なども初め法律學ょ志されたのぢやで何處までも此法律學を勉強されゝバ宜のに其様ぉ事を云ふてん濟んが誠に物事に飽き易いのが御令息の一癖で折角物になりか

一癖とい旨いつけた

若し漢學者をして之を云はしめバ日々に新にして又た日に新たなり

けた法律學もタッタ半年か一年でお廢止る夫から英學で無けにや到底行んと目的を改められたけれど或人の說に當今い英學が流行するけれど是いホンの一時の流行ぢや到底佛蘭西であけにや行んチウので英學も僅に半年餘りでれ仕舞夫のら又候新規巻直しで佛蘭西學とありましたのぢや尤も英學の下地があれバ佛蘭西學に變ッても何程か樂ぢやチウ事ぢやが夫にしても國が違ふと文字も違ひ言葉も替るぢやで人の話しのやうにい行ん樣子ぢやソコで下拙が入らんお世話ながらサッ何も怠助さんの樣に色々に迷ふていい迎も何事も出來上るものでい無いと昔しの例へや何や蚊やを取交て話しを云たら伯父さんい話しが上手ぢや寄席へ行たよりか餘ぽど面白いと一本やられましたぢや

漸くにして合點せり

旨く話しを轉ず老練々々

知らぬがホットけへ

正氣(娼妓)の沙汰でおし

乙海　其樣な不埒な事を云ひましたか嘸かし御立腹でしたぢやらう……其樣子で見ると愚息も隨分道樂者の仲間入を致居つたと見えますナ

甲山　イヤ道樂者と云へバ井上の息子ほど乱暴お奴いありませんぢや此間も吉原へ遊びに出掛たチウが或る割烹店へ這入て一杯飲だチウなァ宜が其家の給仕女が脹れ面を云たとか挨拶の仕やうが何ぢやとか云ふて其處の疊を矢鱈に切るやら未だ張て間もない新しい唐紙に疵をつけるやらして何食ん顔をして出たげお夫のら吉原の何とか云ふ女郎屋へ揚ッた處が平常の相方が病氣で斷つたのが原因で先生い獅子奮迅の勢ひと爲たチウぢや……是い不届きお事を云ふ僕い今夜初めて來たのぢやない已に十五と二十の玉も附てあれバ立派お客樣ぢ

自由ハ自遊の間違ひにハあらずや

即ち是れ失婦の勇

ドウスたら宜からうか酒乱と思ひしあるべし

やのに病氣ぢやチウて外の娼妓を買へチウハ何の多話言ぢや外の娼妓を買はふと買ふまいと僕が自由の權に在る事ぢや夫ぢやのに出過た差圖ケ間しい事を云ふとハ何の事ぢや……ム丶丁解た敵娼的ハ病氣と偽ッて僕を擯斥するのぢやヨシ〳〵當人に逢ふて以後を戒しめて呉んと若い者の留るのも聞入れんで腕まくり仕ながら娼妓の座敷ゑ飛込むが最期可愛想に鉢巻して寐て居ッた娼妓を突然ひきずり起して二ッ三ッ拳骨を食せると娼妓ハ泣き出す樓母ハ怒り出すソレ乱暴人ぢやソレ七人切が始まつたと上から下と大騒ぎ其中に若い者が派出所へ走ッて行て巡査を頼んで來たものぢやから直ゑ拘引されて一夜留められて翌日になると青菜に塩で唯悄々として居ッたチウので色々説諭を受て女郎屋と示談にするが宜チウて下げられる事ハ下られたものゝ其晩に傷めたのハ障子が三枚唐紙が一枚煙草盆を引繰返して蒲團を疵物に去たのが一枚其外に何ぢやか二三品で損害金が十圓チウ騒ぎと爲たのぢやがソコを示談して五圓に負て貰ふたのハ宜が素より一文ゑしの先生ぢやで彼方此方へ泣附た上句に下拙までが其お相伴を食ふて血の出るやうな路用金を二圓奪れたのにハ近頃閉口去ました乙海ハ聞物毎に唯吃驚仰天膽を潰すの外ハ無かりし

損害金ハ素より障子（承知）

頭割あれバ血の出るやうな金を出すが當然なり

先づ坐敷の体裁より説く

○笑ふべし　芋堀の相談會　放笑生稿

廣いと云ッても百疊敷も千疊敷もある譯でハ無いト云ッて毛唐人が能く引合ゑ出す文句の膝を容るゝに足ると云ふやうな狹ッ苦勞しい處でもない早く云へバ狹くなし廣くもゑい十疊敷の中

惜い哉新聞屋の種取居らず

外の家にゝ時計あきゆゑホコリ顔なり

廣間、其天井にゝ二ッ三ッのランプをブラリと下げ坐間にゝ五六個の火鉢を依怙贔負なく配置し正面なる机にゝ數通の書類と筆硯とを備へ三十人足ずの來會者ゝ此處の火鉢の側や、彼處の洋燈の下に頭を揃へ舊幕贔負の爺さんもあれバ開化自慢の壯年もあり或ひゝ姦夫騷動の原因を天狗らしく饒舌る者もあれバ或ひゝ伊勢參宮の計畫を話しする者もあり或ひゝ寢轉ぶ者もあれバ或ひゝ胡坐をかく者もありて種々樣々の浮世話しを爲し居るゝ是ぞ一村相談會の議場にして議事前とこそゝ知られたり柱に掛たる塵埃顏の時計ゝチョキン〳〵と怠りなく針を進め早や午後九時三十五分を示したり(因みに云ふ此の如き會ゝ概ね夜中あり)この時世話係りある議長ゝ滿場の人々を目の下に見て

皆の衆とゝ作者が目の下に見たる處

議長　皆の衆やドウも早ア今夜ゝ御苦勞樣でがんした其處でハア此相談ノウおッ始める前に皆の衆に一ッ聞てへ事があるだアが皆の衆も知ッて御座る通り今夜の相談會ナウなア餘ッぽど大事ぉ事だアから午後七時から開會るナウ事を皆ぉアに觸て遣たアに最ひやア是れ十時にもぉるに七十四戸の中で出て來さしッた衆ゝタッタ二十九人しか無へだア二十九人べェぢやア半分にも足りねへだが是れでもハア此處に出て來さしッた人べェで談しをおッ始めべェか夫とも又た明日にでも仕べェか皆の衆ドウしたら宜かんべェ

議長ゝ問を起したれども皆たゞ白眼競をして居るのみぉり是ゝ各自に誰か何とか云ふだらう何とか云ひ初めたら自己も其尻尾に附て行ふと云ふ覺悟ぉるべし時ゑ六番議員の和良地白藏ゝ火鉢の傍らにコックリ〳〵居眠りをして居りしが全体この男ゝ活

皆の衆とゝ作者が目の下に見たる處

是でもハア質問のかたちを爲す

穿ち得たり〳〵

眠權家

是も眠權家

潑の性質ゆゑ人々が白眼競して默止て居るをチレッ度おもひ突然に鑼聲を發して

白藏　ムヽ御頭(御頭といふ村の頭と云ふ義にて即ち議長を指すあり)の云はッしやる通りだ已等もハァ何時でも集會のある度に刻限通り詰て居るだァあ今まで來ねへチウの餘り人を馬鹿にする仕方だァが來ねへ人の何とか斷りでも有ましたんべェか

議長　アヨ何とも斷りのありましねへだ

十五番色野黑右衛門の今まで高鼾にて眠り居たりしに六番議員の鑼聲に目を覺しモウ始まつたかと云ふやうな樣子で目を摩りあがら鼻のら提燈を出して暫く聞居たりしが勃然と起き直ッて欠伸をしながら

黑右衛門　本員のハァ本員の……ウフン何時でもハァ腹の中に思ッたべェで何にも云ッた事ァ無へだが一体この相談會の議員チウ者ァ戶主に限る筈だのに七十四戶の中で出て來さしッた者のタッタ三十人べェチウあ何たる事だんべェあ負に其内で戶主でねへ息子どんや舍弟達が澤山見えるだ此人達の議員の影法師だァか戶主の替玉に來たのだァの但し又ァ傍聽に來さしッたのだァか一寸ハァ御頭に聞度だ

筈の規則の中にあらぜ

我黨の笑子

議長の迷惑さうな顏をして

議長　今十五番の黑右衛門どんが云はしッた事に就ちやァ私もハァ毎度心配して居ますだァから是の皆の衆が何とか旨へ法を立て呉ッしやれ爾して今夜の別に屆けて出た人もありましねへから規則から云て見りやァ議員の仲間ぢやァ有ましねへ

お頭ァえつかり賴ひせ

黑右衛門　夫でハァ了解りましさァが全体相談會が斯樣に乱れ

退去い恐るべし

情狀酌量

鴉と蝙蝠い素より異あり

ちやァゐらく不都合だァから議員の仲間でねへものァ皆な追拂ッて仕舞はッしやれ

議長　皆の衆も聞ッしやる通りだァが十五番の黒右衛門どんが云はッしやるあァ尤もの事だァけんど夫ぢやァチウて折角來さしッた者をお前い議員ぢや無へから歸らッしやれチウ事ァ己がにや迚も云へましねへが是やァ何したら宜かんべェかなァ此時まで默止して眼王ばのりパチクリ〳〵して居りし一人の壯年あり此男い曾て東京に出て少しい下宿屋の飯も喰し者ゆゑ其言語動作等も自から烏の勘左衛門とい異にして恰も掃溜に鶴の降たる如き調子合なり此壯年い鳥あき鄉の蝙蝠然として平坦平の獅子ッ鼻を無理にピコ附せてニョッキリと突立ち

壯年　議長……承まはれバ只今の中い未だ正式の議事にもあらざる趣きにつき暫く發言を許されたし扨て滿堂の議員諸君ヨ私しい今十五番議員より攻擊を受たる處の息子どんや舍弟の一人にて父與五兵衛病氣につき代理として出頭いたしたる同人の長男與太郎ゐる者で御座います……成ゆど私しい父與五兵衛の代理たる事を届け無かつたのい私しの不行届きで御座いますから此處に改めて戸主與五兵衛の代理たる事を議長に申しあげ併せて議員諸君に報道いたします而して諸君が私しに許すに父與五兵衛の代理たる資格を以てせらるゝあらバ私しい假に議員の資格を以て一言申し述べ度事が御座います夫い何事かと云ふに則ち相談會あるものい代理者を許すも差支へなかるべしと云ふ一事で御座います抑〳〵一村相談會なるものい純粹ゐる村會とい大いに其性質を異にする者であ

演說の稽古場と誤る勿れ

ヒヤ〳〵と云ひ度處

笑談會と改むれバ差支へなかるべし

確信するハ但し自分一人と註を入るべし

懐に會議法の註釋あり

ハテ少し出來が宜過るやうだ

りますから縱ひ代理者即ち息子どんや舍弟の類でも其父あり兄あり戸主たる者が委任して出したる以上ハ他の正格ある議員と肩を並べて議事に與かり可否採決の數に入る事を得る者であらうと確信いたします一体純粹ある町村會議員と云ふものハ素より夫々に撰擧區域を定め撰擧し得る丈の資格ある者が撰擧せられ得べき丈の資格ある者を投票にて撰拔して一町村の前害得失を擧てこの數人に依頼せしものなれバ一人にても撰擧外の人が立入るときハ大に一町村の希望に背くが如き結果なしとも保証し難し否ハ一町村の希望に背くのみならず法律上代理者を許さゞるべきも今この相談會即ち本會の如きハ決して爾でハ御座いませんから是が議員たる者ハ戸主に限るとハ云へ其戸主に於て止を得ざる事故ある時ハ其親族

行屆た鑿穿

濁酒會の方ハ贊成多し

欠席者ハ曰く自酒自遊の權

又ハ子弟をしてこれに代らしむるも利害の上に於て敢て不都合ハ無からふかと思ひますッコで序にモウ一ッ無届け欠席の事について一言申し述ますが扨て此一村相談會の規定たる過半數で無けれバ議事を開く事を得ざるハ勿論の事で御座いませう然るに今夜の出席者ハ僅に三十人にも足ません而して其欠席者ハ何ゆゑ欠席したかと窃のに樣子を見れバ中にハ實に止を得ずして欠席した者もありませうけれども先づ大概ハ自分の家に居て夜業を働らき錢儲けをして居る向もあり或ひハ隣の爺を呼で濁酒會を催ほし居る者も慥に認めましたが元來この相談會ハ一村の利害を審議する處の貴重なる會よして代理者をさへ尙ほ且つ許されぬと云ふ程のものでありながら自家の稼業に從事し或ひハ酒を飲でノラクラして居るなどハ

金あつての物種

取も直さず一村の我々を小馬鹿にした所爲と云はねば成りません何とおれば一方では貴重の時間を費して村制を守って居るに他の一方では之に反して酒を飲み錢儲けをして居るとは甚だ其當を得ないでは御坐いませんの故に私しの思ふに此議事を整理するには先づこの惰け議員を處分するの方法を案ずるが第一着であらふと考へます古人曰く其本乱れて其末の治まる者はあらずと諸君宜しく御注意あらん事を希望致します

此語は息學より出ず

辨舌滔々立板に水を流すが如く述べ立たり衆議員は皆壓氣よ取られて居たりしが暫くあつて二十六番議員夫輪與勘平なる者握り墨丸のまゝ突ッ立て

耳あれども無きが如し

與勘平　今與太さんが云はしった事ァ自己等がにやァハァ何の事ざァか些とも了解ましねへが何にしても此樣に乱れて來たチウなァ確かな取締り法が立て居ねへから起ッた事だんべェと思ひますだァから是からハァ後は無届けで來ねへ者にやァ其過料として人足十人を勤めさし夫から又ァ時刻は七時だの八時だのチウたッても時計のある家は無へのだァから其時刻になつたら矢ッ張り是までの通りに太鼓をドン〳〵敲いて夫から二十分か三十分待て見て夫でも出て來ねへで遲ーく出て來た時にやァ人足二人と過料として勤めさしたなら屹度ハァ顏が揃ひますべェ夫から又ァ此處へ來た者の中にやァ火鉢の傍で大層鼾をかく人もあるだァが是もハァ何とか仕たら宜かんべェと思ひますだァ

罰則にあらざして罰足なり

鼾を禁ずれば寢るのは宜しいか

折から十、一時をチャン〳〵〳〳〳〳〳〳〳〳〳〳と報じければ議長は滿場の人に向ひ

時計ハ議會を開閉するのケンを有す

何でも宜と云ふ起立にてハ無きか

議長　皆の衆の云はッしやる事ァ皆あ道理のある事だァけんど最ひやァ十一時にも成たァから是のち皆の衆の云はッしやッた事に就て決を取て見ますべェ……先づ戸主ダ止を得ねへ事故のある時にやァ其親族で譯の了解る男を以て代理させて差支へのねへチウあァ何だんべェ代理をさせても宜のんべェと思ふ人ハ起て呉ッしやれ

滿場に起立を求めれバ何れも異議なくして總起立あり因て代理にても差支へ無き事に決そ

議長　夫からハァ此度ァ無届け欠席の事だァが是ハハァ何したら宜かんべェ

二十八番舌野長吉突ッ起て

長吉　一寸待て呉ッしやれヨ先きに與勘平さんの云はしッた事もありましたけんど些とんべェ遅く成たチウて人足二人の過料や無届け欠席ハ十人の過料だのチウあァ餘り苛酷やうに思ひますだァから私の考へにやァ遅刻あつた者にやァ人足五分無届けの欠席にやァ人足二人の過料位にして宜のんべェと思ひますだァがドウだんべェ

議長　夫ヨー其位で宜のんべェや……ナァ皆の衆ドウだんべェ其位な事にして置べェぢやあいか……夫でマァ夫ハ宜が夫から鯔をがひて寢るチウ事ァ全体ありましねへけんど其事ァ村會の議事細則にもある事だァから何も別に規則を拵へねへでも宜かんべェ……ッコであァ皆の衆や今夜の議案チウあァ骨ー折て金を溜るチウ大事な事だァに今夜ハ人も揃はねへし夜も深更あつたァから又明日の晩に仕べェ

蓋し自分に其尻を受けし時に困れバあり

議會に問はずして議長の特權を以て決定す是れ實地を知る人にあらざれバ能はざる所

白粉の香に涎を流すゝ都鄙同情

痘痕の數ゝ幾ッありしや

○廢すべし御馳走の無理勸

好笑生稿

町の入口に建たる御祭禮と染出た大幟ゝ温和ある風にペラ〳〵翻り太鼓の音ゝ笛の聲に和してドン〳〵と鳴渡り白髪連ゝ腰をくの字にして杖を便りあがら孫の手を放さず助倍連ゝ娘の尻に附て白粉の香ひに涎をあがし大勢の子供等ゝ飴をなめ〳〵社前に集るあど最も混雜なる有樣ゝ是ぞ此町の鎭守祭禮とぞ知られたり町の中程ある某家の奥坐敷に差向ひたる二人の婦人、一人ゝ年の頃二十四五ばかりと覺しき中年增が客と見ゑて上手に坐を占め又一人ゝ其年四十前後位是ゝ此家の主婦と見ゑたり但し此婦人ゝ疱瘡神ゑ可愛がられたる痘痕面あり既に大勢の客を濟し晩れて來たりし此客に何やら委細の樣子

委細笑知

品物ゝマヅイとも勸め方ゝウマシ

娘の顏ゝ赤飯の赤さより赤し

編者曰く是ゝ田舍の祭禮ゆゑ應答の言語も田舍に倣ふべきあれども餘り煩はしきゝ却ッて看客の嫌厭を來さんを怖れて假に東京の言語を用ゆ諸君其おつもりで……

客　モー澤山に頂戴きました

主　マアさう仰しやらずにモウ少し何卒……餘り美味ゝ御座いませんけれど

客　イエどう致しまして本當にモウ十分頂戴きました

主　マアさう仰しやらずにモウ少し何卒……後ゝモウお勸め申しませんから……彼のお好や(娘の名あるべし)一寸お給仕を……

主婦ゝ客人の持たる器を奪ふが如くに取て給仕の娘に渡せバ娘ゝ早速に赤飯を其器にコテ〳〵山盛にして持て出で敷居を跨ぐ

娘ハ口の中でもブツ〳〵溢したるあるべし

合却に躓けバ赤飯ハ座敷の中へパラッと溢れゝバ

主　お前ハマア本當に粗忽いねへチト氣をおつけヨ

と叱りつくれバ客ハ流石に笑はれもせず顔を背けて極り惡さうに見ぬふりをして居る其間に娘ハ溢れし赤飯を器へ拾ひこみて勝手へ下り程あく復た前より一層高盛にして持出れバ主婦ハ受

とつて

主　サアどうぞ貴嬢……

強て勤むれバ客ハ「ア、困つた」と思へど未だ年若き田舍婦人の事あれバ否む術さへ知らざるゆゑ據ところなく器を受け

客　迚もモウ頂戴けませんけれど折角の御馳走ですから夫ぢやア最少し頂戴きませう

と左も苦し氣に一口ヅゝ鵜呑にし(十分喰し處へ無理に勸められ

居ゐをして見せしむる勿れ

咀嚼す事も出來ざるゆゑ丸呑にするあるべし)凡そ三十分間ほども掛ッて漸く食ひ終ると主婦ハ尚すかさず

主　貴嬢モウ少し如何で御坐います

客　イヱモウ頂戴けません處を無理に頂戴きました位ですから

都合何杯食ひしや

モウ迚も頂戴けません……ナニ御遠慮おしに澤山頂戴きました

餘りお輕くも無からう

と苦しさうに云へバ

主　餘り御輕ふ御坐いますねへ……夫ぢやアお茶一ッ……

客　有りがたう御坐います

是にて膳を退き主婦ハ客を別間へ誘ひて休息せしめたり扨て是より主人夫婦ハ山海の珍味を調へ料理を始めしが程あく準備も出來あがり配膳あゞする中に早や夕景におよびけれバ先口の客

も起出て主人に向ひ

客　ドウも餘りお腹が宜ものでそから心よく寐ましたがモウタ方になりましたね

主人　まだお早ふ御坐いますから御緩りお休み下さい……然すがモウ御酒の支度も出來ましたから何卒座敷へお通り下さい

別間に扣へし他の客人をも座敷へ連れ立ち男連ゝ右に女連ゝ左に男女の席を分て座を占めさせ主人を合せて十二三人先づ一禮も終りて酒宴を始めけるゑ初めのはどゝ皆々眞面目ゑて且献且酬酌交し洗杯數巡に至りし頃二三の客ゝ一同に

客　最早や澤山頂戴致しました何卒これにて御納杯に願ひます

主人　イヤ未だ根ッから召上ッて下さらあい樣ですが何卒マア此樣お無味手料理でもドウか御遠慮あく召上つてチトお過し

能くマア半に成らあこのつた

男女別あり感心々々

虚言ばかり

普通の順序

隱し藝の演習

野蠻の遺風

下さい

勸められても二度三度ゝ澤山頂戴いたしました御納杯をと辭退も云たれ微醉機嫌の其上へ又さゝれる杯の數も追々かさおれば御納杯モウ澤山も何處へやら端唄どゞ一トッチリトン角力甚九に大津繪ぶし調子はづれの口三味線太皷の假聲ドン〳〵〳〵盲滅法騷ぎ立つ中にも一際目に立ゝ四十を三ッ四ッ越す位ゐの婦人が湯文字一ッの眞裸体に摺鉢を持ゞ同じ年頃なる親爺が捻鉢卷に摺木を擔ぎたる裸体踊りゝ滿場の大喝采なりしが其果てゝ井鉢を枕ゑして打倒れるものありゲー〳〵小間物店を出すもありて坐中ゝ恰然戰場の跡を見し如く彼處にもゴロリ此にもゴロリ復た一人の禮儀を正して歸るものあし

好笑生曰く田舍の祭禮ゑ御馳走の振舞をする有樣ゝ大抵みな

是から小言の初まり

馬鹿か此限にあらず

劇しければ避病院へ護送せらる

謹聽々々

此様なものなり全体日本の人は田舎に限らず都會にても妙な習慣ありてもウ澤山頂戴いたしました十分飲ましたと云つてもモウお一ッモウ一杯と無理遣に食せたり飲せたりする習慣があるが是は以ての外の事で御坐る元來人間には食ふにも飲むも大抵適度と云ふ境界のある者なれば十分飲み食せし後は飲れもせず食れもせぬものなり然るに其適度の境界を通りぬけた其上に又無理無体よ遣かそゆゑ例のゲー〳〵たる小間物店を開業するに至るあり啻に小間物店を開業するのみならず折角金と勞力とを費して饗應し客に歡心を得させんとの目的は却ッて客に二日酔と大頭痛の難儀を與へ又た自分も其小間物店を片附る様な厄介を求むるに至ッては豈に御馳走の本意あらんや豈に饗應の本旨ならんや併し是は只主人公ばかりを責べきにあらず勿論強て飲せ喰せする主人公は第一罪が重いよ相違なしと雖も十分頂戴致しましたモウ澤山飲みましたと云ひながら假ひ何程強らるればとて勸められればとて又飲だり喰たりする客人も無論無罪放免とは言渡し兼る次第あり

結末頗る妙

寺の屋根まで大陽が上りしゆゑに住寺なり若し裁判所の屋根へ上れば公事と知るべし

○感ずべー人足の改良論

談笑生　稿

權十　ヤァ彦作ウもう何時だんべエ

彦作　さうよなァ太陽様がモー圓照寺の上まで昇らしやッたァから彼れ是れ十時よも成たんべエかなァ

權十　モーひやァ十時にもなるだァに後の奴等アハァ何をして居るだんべエ……エヽいけ馬鹿〳〵しい何程ハァ人足だァからチウても己等ァ是れ七時頃から此處へ詰て居るだァに世

話係の一人も來ねへたァ餘り人を馬鹿にして居るぢやァ無へか……モウ三時間も眠たァから眠むくも無へし川向ふの畑へでも往て草刈の手傳へでも仕て遣てへ位だァが其跡へ後の奴等ァが遣て來やァがると折角今まで待て居たァ甲斐が無へ

暗に辨護の口氣あり

彦作　アニモウ些と待て居りやァ其中に大概來るだんべェ……時に權十此間妓樓へ行たときに大層モテたァチウ事だが些とんべェ恍話でも聞さねへうい

謹聽々々

權十　アーニ大違へヨ持た處かいマァ斯云ふ譯あんだァ聞て呉やァ……揚り込で燈火で見た時にやァ餘ッぽと上等金箔附の別嬪だァと思ッてねへヨ實ァ內心で喜んで居たゞァ

彦作　なるほど……

權十　スルトお前其女郎めいおァよ前の晩に情夫でも來たァざ

かも知れん

か何だか知んねへが寢所に這入ると其儘グウ〳〵〳〵高鼾で眠やァがるのよ……夫から起すべェのと思ッたァけんど何だか極りが悪いからあァ

保証し難し

彦作　餘り極りを惡がる方でも有んめへ……

權十　マァ默止て聞ねへヨ……夫から呑度も無へ煙草を呑で二時頃まで盆槍して居たァだスルと其中に女郎めが動き出したァから〴〵た目を覺したゞと喜んで居るとドウして中々起ねへのヨ

但し灰吹い餘程迷惑せし樣子

彦作　ハーテあ……

權十　さう斯して居るチウと何だこの蒲團の上が冷然からハテナ何ざんべェと思ふとマァ聞ねへ話しぢやァねへか女郎めが寢小便を垂れやァがつたんだ

何だか虛言らしい

彦作　ムヽ、成程アハヽヽヽ

權十　夫からあアよ餘り强腹だアからヤイ阿婦起ねへかと突き起すと阿魔的ハ寢惚け眼をつッ摩りあがら氣の毒さうにコッコッと逃て行て仕舞たアだがトウ〳〵夫でハア結局よ

彦作　夫やアハアとゑれへ奴に遭遇したあア……ムヽ向ふから大勢の聲がするだアが大概村の奴等アが遣て來んだんべエと權十と彦作の兩人ハ煙草をくゆらしあがら話しをして居る折から村の世話役が先に立ち後ゑ從ふ人足共ハ傍の土手へ腰を打かくれバ彦作ハ口を尖らして

彦作　何だ馬鹿にマア遲いぢやアねへかモーひやア今日ハ十時だんべエぢやねへか己等ア二人ハハア七時頃から此處へ來て待て居るだアに世話役の人も來さッしやらねへものだアから

世話掛の人も來あけれ

是こそ本當に狐にだまされしなり

何を何して宜だアかサッパリハア譯が解りましねへぐ本當に二人で盆搶して待草臥たアよ

晩れて來りし人足の一人ある馬吉と云へる爺がねさばり出て兩人に向ひ

馬吉　何だとお前さん達ア何を云はッしやるだア比時から來たの八時から詰たのッて……マア物も積ッて見さッしやれや夫やアハアお前さん達ア徵兵に出て居ざしッたアかふ鉄砲の稽古でもする氣で居さッしやるか知んねへが村人足に出るのに朝飯も碌に食ねへで出る者ア一人もありましねへだ……己等あんざアハア此間中池田まで會社の荷を持て七里の所を日歸りして居たアだが昨日昨の下の土橋で車を突轉ばして心棒を折た上句に向ふ鬧をドエライめに打たアから今日ハハア

働く世話もなし

此爺も中々面白い駁論者あり

辛抱(心棒)が折れてい働らけぬ筈

荆妻の酌とん癖に障る

休むべェと思ッて昨夜ん荆妻の酌で二十錢の濁酒をやつて居る處へ今日の人足が當ッたァから二日醉や三日醉をしても何もハァ自分の手間を損する氣遣いねへのら一畑鍋餘計にやらかしたら案の狀今朝んハァ頭が重くッて堪んねへから寢轉んで居たァだが役場の太鼓が四度鳴たァチウて荆妻めが八ケ間しくッて仕方がねへのらヤットの事ヂ起て飯も食はねへでッロ〳〵役場へ往て見たらァーニまだ舊兵衛隱居と弊右衛門どんと餓鬼共が四五人きりだァから世話役の茶を御馳走にあつて居る中に段々頭が揃ッたァのら今來たァだにお前さん達ァ頼みも仕ねへに七時から詰たなんぞと云はッしやるだァが夫やァハァ七時から來さッしやらうが六時から詰さッしやらうがお前さん達の醉狂だァな……――くれァハァ堪んねへ餘り饒

目の廻るん饒舌た精にあらず酒の精なり

直言

舌ッて目が廻ッて來たァ

語未だ畢らざるに權十んし急に戸見をぎながら

權十　オイ爺樣ァお前ん途方途徹もねへ事ヂ云はッしやるぢやァねへか全体お前見たやうな厄介ものが澤山あるから政府の御苦勞が絶ねへだァ怠ッて見さッしやれお前の樣に怠惰者が多いから日本國中ぢやァ何の位損をして居るだァか知んねへだト云ッたべェぢやァ何の事だか解るめへが自己がハァ其講釋を語ッて聞すべェから能く耳糞をホヂクッて聽かッしやれ一体この道ん誰が通る道だァと思ッて居さッしやるヤ

聽から其講釋を語ッて見さつしやれ

馬吉　又ァ理屈を云ふだァな……誰がハァ通るッて天が下の人間ん皆な通るべェや誰彼チウて其勘定が出來るものかい

權十　ホラ其天が下の人間の中にやァお前も交ッて居べェ勿論

徴兵を務め
し効能是に
於てか在り
ヒヤ〳〵
ヂげすかあ

千人だァ万人だァチウて數限のある譯ぢやァねへ日本人でも外國人でも何處の人が通るか知んねへ道だァから手前せへ差支へが無けにやァ修繕も何にもするにやァ當らねへと思はッしやるかも知んねへがマァ能く考がへて見さッしやれ道がハァ打破損ても自已一人せへ通るのに差支へが無けにやァ宜チウて日本國中何處でも修繕を仕あかつた日にやァお前のやうに車を曳て飯を食て居る人ァ歩行道があんめへ……ホレ見さッしやれ夫れだァから矢ッ張り村ゝ村、町ゝ町で各自に其持前の處を修繕はなけにやァ成んねへだ……一体この道の修繕あんざァ一人の仕事と違ッて早く云ッて見りやァ天下相持の仕事ざァ天下相持の仕事だァから自分の畑あんぞへ出るよかァ猶早く出て働らか無けよやァ成んねへものだァあ

其通り

人足ゝ算盤を以て働くべし

馬吉　天下相持だァか何だの知んねへが長談議ゝモー廃止にさべェや

權十　夫だァのにお前達ァ今時分ノソ〳〵出て來ざッしッてお負に村人足ゝ出るあァ平生の骨休めか何かに出るやうあ心得で居さッしやるだァから大變あ大間違へだ能く物の損得チウ事を考げへて見さッしやれモー是れ十一時にあるだァが自已等がの樣に七時ゝら出て働くと今までにやァ四時間も働けるだァから此村の五十戸から五十人の人足が出るとするチウと最二百時間無益にした譯だァ一日朝の七時から暮の六時までの中で二時間ゝ休みと見て丸で働く時間を九時間としてもハァ今までにやァ二十二人二分二厘二毛二朱二忽餘の人足を損した割合だァ五十戸から二十二人の損だものハァ溜るもんぢ

暗に経済の意を含む讀む人注意すべき處

上の爲す處に下これに習ふ

權十や理屈通りに働らけるや否や

やァねへヤ……今仕事に掛ッたァチウても其心持だァから碌な働きに仕ねへで五日で出來る仕事に十日もハァ掛り百人で仕あがる仕事に二百人もハァ掛るやうに成て來るだァ今の人足チウあァ大概此樣な厄介者ベェだから人足稼ぎベェでも日本國中ぢやァ一年に五万圓や十万圓の損ぢやァねへだ……

……併し是やァ小前の者ベェが悪い譯ぢやァ無へ第一世話アする人の取締りが悪いのらハァ起る事だ……どうだい爺樣ァ解ッたのい……夫に就ても此樣な事ベェ饒舌ッて居ちやァ成んめへ……サァ一番腕まヨリをかけて働くベェ

一同に澁い顔を仕ながらも默然として聞居たりしが道理至極なる權十の話しに皆々感服せし樣子にて最早や正午にも近づきけれバドレ一働き働かんと世話役の號令に打連て一同に鋤鍬を手に採て仕事に取掛れり

○務むべし身体の衛生

苦笑生稿

甲吉　オイ兄弟……今度東京から來た何とか云ふ男ゲ觀音堂で演説だァとか説教だァとかをして聞かせるチウ事だが何も保養だァ往て聞て見ベェや

乙三　ムゝさうか全体演説チウあァ何の事だい然じて木戸錢いイタラだい

甲吉　アーコ錢なんざァ一文も取らねへチウ事だ太郎ゲ一昨日の晩上野村の學校で聽て來たさうだが滑稽が交つて餘ッぽど面白かつたとヨ今夜の外題に傾城が何たらしたチウのださうだが大抵宮城野信夫か何かの仇討だんべェと思ふだァ

錢を取るやうあら自己も行やァしねへ

或人の狂句に曰く出來合の洋服書生開化ぶり（買被り）とゝ即ち此類か

先生様の様に直打あり

乙三　さうよあァ何だか自己にも分んねへが何にしろ錢の入ねへ事あら出掛て見べェぢや無へか

と兩人が衛生演説の事に就て取々の話しをして居る處へ向ふより釜形の帽子を戴き午後の五時頃とも覺しきヅボンの短き洋服を着し小脇よゝ白銀巾に包みたる小さき書物やうの物を抱へ所班らの鰌ッ髭を撚繰あがら靴音高くギシ〳〵遣て來る隊長ゝ云はでも知るき小學校の教員あるべし斯と見るより甲吉乙三の二人ゝ一禮をして

甲吉　先生様に一寸ハァお聞申しますが今夜アノー觀音堂で東京の講釋師が傾城の仇討だァとか何とかを語るチウ事を聞ましたァが本當で御坐いますかあァ

教員　あるほど今夜ゝ觀音堂で東京の辨士が衛生演説を辨じ

先生様の被子ゝメッかう勅任官の容体

了解ぬ處を教授べェとゝ感心〳〵

傍聽無料の効能ゝ是に於て明かあり

うだ……衛生演説と云ふのゝ我々人間の身体の用心の仕方を云ふので人間たる者ゝ是非とも心得ねバ成らん大切あ事だから小生も聽に行つもりで出掛た處サ決してお前方の云ふ仇討や戰爭の話しでゝ無いけれど隨分身の爲になる事だからお前達も聽に行が宜

乙三　ハァ傾城ぢやァねへ衛生チウので御座いますかあァ何にしろ己等も行くべェと思ッて二人で話して居た處だァのら其衛生チウ身の爲になる事を聽て見ますべェ……ヤァ甲吉―先生様のお供をして行て又たァ了解ねへ處があつたら能く教授べェ

と三人連立ち觀音堂の客殿に至れバ村中の人々ゝギシ〳〵と詰かけて質に立錐の餘地も餘さず此時貧士ドッコイ辨士ゝ早や演

カチて心得居るべし

寐て待つゝ果報に非ずして阿房なり

壇に上りて演説中なれバ滿堂ヒッソリとして聽き居たり

辨士　是ゝ素より當地ばかりでゝ無い田舍でゝ一体何處でも此樣なもので身体の保護方にゝ常に注意が湖いやうに思はれますが諸君よくマア考へて御覽じろ此世の中で金が第一の寶だの旨い物がどうだと云ッても身体が人並で無けれバイクラ金があつても何の益にも立ぢ何樣なに旨い物があつても些とも旨い事ゝ御坐いません今農業をするにしても身体が健康で無けれバ十分ゑ働けず又た商賣をするにしても店頭に蒼い顔をして寐て居てゝ買人が參りませず又た職人でも何でも身体わど大切おものゝありません諺にも命あつての物種と云ふのゝ此處の事だらうと思ひます然るに在方へ參ッて見ると雨が降ても雨具も着ず土用の中の暑い盛りに笠も被らず裸体におり

木の利ぬ人かあ

其樣な事とゝ露知らぢ

盲目を無益の物の中へ入れるゝ入れる人が盲目なり

跣足で歩く人も澤山見え又た家に居ッても暑中ゝ身体の持扱かひに困るとか或ひゝ手足がダルイとか何とか云ッて木の蔭あどへ碌々に敷物も敷ずに寐轉ぶ人もありますが夜中にあると終日太陽に照された空氣が水氣に變じ露とおつて掛ります から起て見ると衣服がビッショリ濕ッて居ります此露ゝ衣服を濕すと同じに身体へも掛ッて大層身体の障りにおります或人の話しに世の中に無益なものが五ッある先づ第一が蚊ろの次ゝ蠅と蚤と虱と夫から盲目だと云ひましたが私しが今考へて見るのに蚊でも蠅でも蚤でも虱でも決して用のおい物ゝなく却ッて我々が身体の保護をして呉る實に大切おもので造物主も之を造るにゝ餘ほど工夫し大層心配して拵らへられたもので有らうと存じます ト云ッたら諸君ゝ定めし化源お顔をし

生血を吸ふのゝ蚊と虱ノミあらず

謹聽々々

横合から一寸御注意申す三ッ蒲團

てオイ演説者お前ゝ少し氣でも違ッてゝ居やァせんか元來彼の蚤や虱と云ふものゝ人間の生血を吸ひお自に糞などを放掛て實ま憎い奴だ世の中に彼樣お無益なものゝない然るに演説者ゝこれを身体の保護者とするとゝ何たる間抜だらうと云はるゝで御坐いませうが諸君よマァ其樣お手前勝手や惡口を云はあいで私しの云ふ處を篤とお聞下さい私しゝ別段氣が違ッた譯でもあく又た蚊や蚤や虱から辨護の依頼を受た譯でも御坐いませんが饒舌り序に蚊や蚤の効用を一寸お話し致しませう、エヘン前にも申しました通り大暑の頃ゝ兎角身持が苦しいから少しでも涼しい處と各自の勝手な處を撰んで板の間でも土間でも氣儘に寐やうと致しますが斯く氣儘に何處へでも勝手お處へ寐ると夜風ま吹れて風邪を引とか夜露に中ッて冷氣

の上へ寐ても殘中の冷氣を引起しますす

ハイ〳〵と返事して聽くべし

歐陽叔の反對説

を引込むとか色々な病氣の原因を作り出します然るを此時こそ蚊の先生がプーン〳〵と出て來てチク〳〵と刺ますから何しで悠々と寐て居る事ゝ出來ません是非坐敷へ引込で蚊帳の中へ這入る樣になりますから此が即ち人の病根を作り出さあいやうに仕て呉る蚊の効能で御座います次に蠅で御座いますが暑中ゝ兎角食物が腐り易いものなれど去りとて少し臭い位の食物ゝ棄るのも勿体ないとか之を粗末にしてゝ神樣の罰が當るとか云ッて中〳〵棄る氣にならないのが十人の中で八九人までの習慣で御座いますが一体蠅公ゝ其處へ往ちやァ御役目ですから食ひ殘しや腐りかけの物か何かあると忽ち黒山のやうに寄集ッて舐ッたり糞を放かけたりして迚も人間にゝ食れない樣にして仕舞ますから據ろなく之を打棄ッて仕舞ます

ハイ〳〵

身体を洗ふ序でに心の垢も洗ふべし

ヒヤ〳〵

是が即ち蠅い人間に腐敗物を食て身体を損おはおいやうにする一ッの効能で御座いますが次に蚤と虱の事で御座いますが一体人間の身体にい毛穴と云ふ極々些細お穴があつて夜晝休みおく此穴から水氣が出て居るものですが身体へ垢が溜りますと此穴が塞がつて仕舞て色々の作用を止め又た色々な病氣を引出すもので御座いますから時々湯を以て身体を洗ひ又た衣類も洗濯する譯ですが若これを怠りますと蚤や虱が湧て痒くッて堪りませんから湯にも這入り衣類も洗濯して奇麗にして置くやうにあります是が即ち蚤や虱い人の身体を清潔にせしむるの効能で御座います爾して盲目い何かと云ふに盲目だからとて矢張我々と同じ人間で只五官の中で目が不足するだけの事で御座います殊に當今の盲目い昔時の盲目とい違ッて盲

其他の不具い啞て知るべし

湯談大敵

之を是れ臭慣と云ふ

啞學校と云ふ學校もあつて盲目も文字を書き啞も立派な言語を發して人と話しをする時節で御座いますから目があつても節穴同様の人に比べて見れば盲目の方が餘ほど上等の人間で御座います又私しい只今一寸湯の事を云ッたので思ひ出しましたが在方でい小便壺の上あぢへ風呂を拵へておく家がイクラもありますが在方の人い平生よお近附にあつて居るから左程臭いとも思ひますまいが私し共が偶に此地方へ來て湯に這入りますと狐に魅れて小便壺へでも這入たやうな心持が致します好しやお近附よあつて臭味が沸いにせよ便所から騰る氣い必らず身体に障りますから折角身体を清潔やうと思つて湯に這入のが却ッて糞や小便の分子をつけに行やうな者ですから實に馬鹿〳〵しい譯で御座います衛生と云へば一寸六ケ敷

永世注意すべき事

試に演説者先生に問ふ後腹の痛い時にゝ如何して宜しきや

やうで御座いますけれども此位のことゝ少し氣を付ますと隨分完全に至る者で御座いますて又た田舍でゝ病氣と云ッても中平氣なもので少しばかりの事は藥などを呑で休むと却ッて宜あいあと云ッて食へもせぬ食物を強て食せたり或ひゝ身体よ申し分のある者を無理に稼がせたり抔するのゝ甚だ心得の違ッた話しで御座いますが夫も一寸腹が痛いとか又ゝ少し氣分が惡いとか云ふ位の時にゝ寶丹か神藥ぐらゐでも隨分癒ッて仕舞ふ事もありますけれどもウン〳〵迂鳴て寐て居あがら醫者にも診て貰はず藥も飲ます好まぬ物を食ひ無理に働きなどしてゝ却ッて病氣の勢力を助けて遣るやうあもので必らず重症なつても醫者を頼むよりゝ神佛を祈るのが專一だあどと云ッて念佛を唱へたりお百度を踏だ

りして中々容易に醫者ゝ頼みません勿論神樣や佛樣を祈るも惡い事でゝ御坐いませんけれども神樣や佛樣ゝ何も醫學校の卒業免狀を持て居られる譯でもあし又藥を調合しても下さるまいからイッヲ頼んだからとてオイソレ宜しい請合たとゝ決して仰しやらあいで御坐いませう殊に其連中の最も甚だじき人はあると只自分や家内の祈るばかりであく主驗だとか山師（ドッコイ）山伏だとかに誑されて拙者が祈禱して遣れば早速癒る又た此後とても延命息災家運長久だが併しお初穂料が一圓にお札が二圓夫から何がイソヲに何が何程と忽ち四圓も五圓も騙取ます併し夫でも癒りさへすればお安いものなれど夫はどの病人を醫者にも掛ず藥も用ひず日を送る中にゝ益々重症あり今日か明日かと云ふ場合になつて俄ま目が覺め據でろ

ヒヤ〳〵

食ん（九圓）から割出した祈禱料

但し西洋醫者い瓶を投る

醫者曰く患者々々（感謝々々）

併し南無阿彌陀佛と云ふ者も慥かに有つた筈

誠によい恰好（學校）

轉んで石を握る奴い吝嗇坊の息子なり

あく醫者を頼んで診察して貰ッても療治が後れた全快い覺束あいと匕を投げられても尙や斷念めが就ないで一度に二人三人の醫者を頼んでも己に六日の菖蒲十日の菊なか〳〵助かる事い出來ません夫ですから最初祈禱などに費す金にて醫藥の料に充たあら死る命も助かります斯樣に申せばとて當地にい個樣な不必得千万な人い一人半欠もありますまいが併し多い人の中にい必らず無いとも限りませんから念のため一寸お話し申した譯で御座います僧衛生の事に就てい未だ澤山申しあげる事が御座いますけれども獨り舞臺で咽が引附さうですから一寸水を一杯……

此時ヒヤ〳〵〳〵と拍手喝采の聲い一時滿堂に轟きたりト云ひ度き處あれど素より衛生と傾城とを間違へて居る樣な聽衆ゆゑ了解たのか了解ないのか誰も何とも云ふ者もなく聽衆も皆アンケラカンたりンケラカンたれば辯士も亦たアンケラカンたり

○思ふべし兒童の教育

可笑生稿

外園にい青ペンキ塗の駒寄あり其中にい大小取交て十五六本のナヤボ檜葉を植ゑ中ある家い平家建の日本普請あれども外面だけい白ペンキを以て塗たり裏にい五六十坪の遊歩場ありて表に町村立何々小學校の札を掲げたるい云はずと知れた町村聯合の小學校あるべし折から放課時間と見て大勢の椀白小僧い取組合をする者もあれば逃て追駈るもあり張倒されて泣者もあれば打轉んで笑ふ者もあり坊主をして之を評せしめば餓鬼の放生會と云ふあるべく又た教員をして芝居心あらしめば何れを見ても

移り替とゝガラにない意氣ゐ文句

骨皮道人もチト頼み度ものなり

山家成長と源藏を氣取ゐるべし時に小腰を屈めて入り來りたるゝ三十六七とも覺しき職人体の男其處に居合す一人の敎員に向かひて

男　へイ御免ゐせへ自己れ東京から來て居る熊藏と云ふ者ですが實ァ借金取にやァ責られ山の神にやァ移り替の何のと口説かれゐ貧に餓鬼ゝ餓鬼で生意氣に帽子だの靴だのと八ヶ間敷ッて堪らねへかう何とか一儲け遣附やうと雁首を傾て考へやしたが別に旨へ口も發見やせんからハテ困ッた者だと思ッて居る處へ貧乏小路の借金屋質之助が來て田舍へ借金の云譯に頼みてへと云ひやすから自己も考へやしたが借金の云譯ゝ餘り下さらねへ役廻りだけれどもマァ自家で山の神の泣言を聞て居るよりやァ宜と思ッて其役目を引受けやして此間からッ

ッチの押賣かと思ッた

聲の善惡ゝ云はぬが花

イこの門前の宿屋へ泊り込で借金延を打て居る處毎日〳〵お稽古の聲が聞ねやすので自己も餓鬼を持て居りやすから一寸拜見を願ひてへと思ッて出やしたが如何でせう拜見ゝ出來やそめへか

敎員　何の用かと思ッたら參觀ですか……參觀ゐら今に授業を始めるから彼處の參觀席と札の張てある處へ行つて此券を持て扣へて居なさい

折から聞ゆる唱歌の聲

春の彌生の。あけぼのに。四方の山邊を。見渡せば。花盛りかも。さくらくものの。かゝらぬ峯こそ。なかりけれ。花たちばなも。香ふゐり。軒の菖蒲も。かをるなり。夕暮さまの。さみだれに。山ほとゝぎす。おのるなり。秋のはじめに。なりぬれば。今年も中ゝ。すぎにけり。わがよふ

號令を掛て大勢の生徒に兵式体操を教ゆるが故に陸軍に髣髴たる名あり曰く餓鬼大將

けゆく。月かげの。傾ぶく見るこそ。哀れなれ。多の夜寒の。あさぼらけ。契りし山路ハ。雪ふかし。心のあとハ。つかねども。おもひ遣こそ。

あはれあれ。

と生徒ハ唱歌を唱ッて居る折から拆木をカチ〳〵〳〵〳〵

生徒　サア拆木が鳴たァぞ教場さ這入んだ

教員　列を――作れ――

の號令にて生徒ハ眞直に齊列ふ

教員　廻れ――右

此號令にて一同廻る

教員　足踏み……左り右、左り右、〳〵〳〵〳〵……止

め……一……二……三

教員の命令に從ッて生徒ハ各〳〵自分の席に就く教員ハ塗板の

能く覺えて其通りにせよとハ恰も親の子に異見するよ魂を入れ替へろと云ふが如きにあらずや

前に立ち白墨を取て生徒心得と書終り

教員　今日ハ皆さんの平常心得て居らねバならない事のお話しを致しますから柔順くして聞て能く覺えて其通りに仕あけれバ成りません……ッコで皆さんよ聞ますが皆さんハ朝起た

ら何をますの

三郎　裸体で出て小便を垂んだ

およし　我ハ着物を着て帶をメます

太郎　自己ハ糞もたれまそ

教員　後の人ハどう云ますか

次郎　自己ハ裸体で小便あんど垂ないでお好さんの樣に着物を

着て帶を云めんだ……

おはな　私もさう致ます

私しもさう云ますとい中々狡猾な奴ッ

男生徒い皆女生徒に壓せらるゝの姿あり

教員　お好さんや次郎さんの樣ゑ起ると着物を着て帶を去める

人い手を擧て……

三人を除くの外い皆手を擧る

教員　宜しい……皆さう仕おけれバ成りませんよ三郎さんも明日うち起ると直に着物を着て帶をゞるのですヨ裸体で歩行てい成りませんよ……朝起て衣物を着て帶を去めて夫から何しますか

寅吉　學校さ來るざァ

丑藏　飯喰つて學校さ來んだ

おきさ　顏を洗ッたり口の中を洗ッたりして飯を食て石盤や筆あんど持て學校さ來ます

教員　さうです……衣物を着たら口の中を洗ッて顏を洗て

至れり盡せり

夫からお父さんやおッ母さんを始め家の人達にお早ふ御坐いますとお辭儀をして御飯を食てから學校で遣ふ品物抔を忘れない樣に氣を附て夫から又た行て參りますとお辭儀をして家を出て友達の所を通ッたら誘ッてさうして學校へ來るのです……夫から御飯を食るにい何樣な塩梅に食ますか

卯八の答辨い簡單にして盡せり

卯八　口さ食ます

お梅　箸を持て食ふだ

源吉　お汁をかけてサラ〳〵と食てお菜も食ふだ

教員　食殘したり溢したりしてい成ませんヲ……然して旨い

お菜が無かッたら何しますか

三郎　戸棚を明て旨い物を出して食ひます

教員　あなた自分で戸棚あどを明て旨い物を出してい行ませんヲ

旨い〳〵

チおッ母さん下さいと云ふのですョ又下さいと云はあくても旨い物のある時ハおッ母さんハ何時でも下さいませう

三郎　おッ母さんハ四郎がおッ母さんだもの四郎にベェ呉て自己にハ少しばか呉あいだものョ

教員　おッ母さんハ四郎のおッ母さんだッて矢ッ張あなたのおッ母さんでせう

三郎　ムヽヽ四郎のおッ母さんだ自己のおッ母さんハ遠くに死んで仕舞たんだ

教員　さうですか夫ぢやァ彼方のおッ母さんハ死去なつたのでッ今のハ後のおッ母さんですか夫あら猶の事氣を附て云ふ事を聞かあけれバ成りませんョ

と教るハ教るものヽ心の中でハ昔しハ繼母の繼子を苛酷取扱ッたと云ふ話しも往々聞て居るが未だ矢張り其跡を絶んか知らん

心の中で母アと思ッたのか

嗚呼世の中にハ非道な女のあつたものだ又それを知つて居るか知らぬか見逃しにして置く亭主も亭主だなど獨り語ッヽ流石ハ教員色にも出さず

三郎　云ふ事を聞かあいと頭を打たれるから何でも云ふ事を聞くだァ

是より教員ハ學校内の心得かた家へ歸ッての心得方等を最も懇切ゐ教訓しが彼の熊藏ハ眠氣が催ほしてガックリ〳〵遣て居りしゆゑ大分聽漏したる個條もありし樣子折から教員の高聲に目を覺せバ

熊藏以爲らく高聲恐るべしと

教員　皆さんの心得べき事ハ大概お話し致しましたが皆さんの言葉がまだ直りませんッ先刻から聞て居るに「小便を垂んだ」の

國の手形の改良

「帶を志めんだ」の「學校さ來る」だのと云ひましたが、ドウも失でわいけません一体言葉と云ふものゝ小生のやうに大人になると中々直りにくい者だから皆さんの樣に學校へ出て居る中に能く直さあけれバ成りません……ソコで「小便をたれんだ」ゝ「小便を志ます」との或ひゝ「小用に參ります」との直し「帶を〆んだ」ゝ「帶を志めます」と云ふやうに語尾を「ます」ときるのでせ……三郎さん云ッて御覽

三郎　小便をたれんだ……ます

皆々アハヽヽヽヽ

教員　小便を志ますと云へバ宜のです「んだ」ゝ入あいのです……モウ一度云ッて御覽

三郎　小便をた……れんだま……小便をたれます

奚學校

さ用で御坐る

教員　さうですマア其位あら少しゝ直りました……今度ゝ次郎さん彼方云ッて御覽

次郎　帶を志めます

教員　大層よく出來ますチ……それから皆さんゝ「學校さ行く」「山さ登る」「川さ遊びに行く」とよく山さ川さと云ひますが是ゝ「學校へ行く」「山へ登る」「川に遊ぶ」と斯いふ樣に、さ」を「へ」と直さなければ行けません……サア誰か云ッて御覽

甲吉　學校……學校……學校さ來ます

教員　甲吉さんゝ未だ直りません

卯八ゝ手をあげながら

卯八　學校へ來ます

教員　それで宜です……夫から物を貰ふのゝ「くんさい」「くだッ

能く覺へてください

至極尤もの質問

しよ」「くだんしよ」などと色々に云ひますが「紙をください」「筆を下さい」と云ふやうに直す方が宜のです

丑藏　先生自家の祖父さんが學校で習ッたやうに自家へ歸ッて「くださいと云ッたら此治郎め江戸言葉を使ッて生意氣な奴だッて叱りますから學校でべエ「くださいと云ッて自家でも「ください」と云ッても宜のですか

教員　イエ矢張り「ください」と云ふのです祖父さんが叱るから小生が決して叱らない樣に話しを仕て置ませう

てのとき時計の音チン〳〵〳〵〳〵〳〵　柝木の音カチ〳〵〳〵〳〵

熊藏　サア休みになつた自己もモウ歸らう

と熊藏は參觀券を納めやうと思ひ懷ろを搜したが何處へこの失ふたと見え獨りでマゴ〳〵あがち

感服したと云ふも亦た感服

お食掌と書きたい處

熊藏　ハテナ何處へ遣たか知ら……ム、此處にあつた〳〵

と熊藏は參觀券を教員に還附しながら

熊藏　先生券をお返し申しやす……ドウも感服いたしやした

恐れ入りやすチ朝起ると着物を着る事から夜る寢る事までのお世話樣は實に大概の事ぢやア御座やせんチ自己も冶郎が一疋阿魔ッちよが二疋ありやすが多寡の知れた三人の餓鬼でせへ中々〳〵手にも齒にもおへねへで時々にやア拳骨の三ッ四ッは食はせる位ですのに五十人も百人も他人の餓鬼を集めて五郎さんの貴方のと御機嫌を取〳〵頭の兀た親父も知らねへ六ケ敷事を覺えさせるさア誠に實よ恐れ入やした流石お職掌で御座へやす……へイ恐れ入りやした

教員　さうサ中々心配お務めで私のやうな朱熟な者でも出來兼

評者も曰く誠に御尤も千万

飛だ處で棚おろし

る事ぞがお前も先刻から聞かれた通り着物の着方や飯の食ひ方まで學校で教なければ成らず其うへ言葉あどゝ學校と自分の家でゝ丸で大違ひになつて居るから猶更骨が折れます

熊藏　如何にも御尤も千万です先刻聞ましたのに「ください」と云ふと江戸言葉だとか何とかッて舊弊嗅い老耄めが孫をケナス たァ餘まりな話しです子本當に餓鬼を仕立るにやァ餘ぽど親達が氣を附け無くちやァ行けやせん自己なんざァ餓鬼の頃から極怠惰ものでしたから手習師匠へあがッても途中で辨當を食ッて犬の喧嘩や賴まれも仕ねへ車の跡押で日を暮して孝經の孝の字せへ碌玉に覺えず手紙あら一筆啓上の一の字も書ねへ癖に十五六から酒と女郎が大好で親父の紙入や母親の巾着を狙ッて一文なしで揚り込んでゝ馬を引張て來た事も度々で

酒を飲だ揚句あれゞ是れ醉狂

此奴少しゝ話せるわい

したがトウ〳〵家を飛出して書入も寫眞にも取れねへ難儀苦勞をしてヤット飯の種に有りつきやして夫から山の神を背負こみ餓鬼をもつて知る親の恩、昔しの人ァ旨へ事を云ひやした子孝行をしてへ頃にゝ親ゝ死去り夫から仕方がねへから餓鬼だけもドウかして一人前の人間に拵へて遣てへと思ッて治郎と阿魔ッちよを一疋づゝ學校へ出して置ものですから急に學校が好にありやして何處へ行ても閑暇せへありやァ學校へ拜見に參りやそが近頃の學校ゝ誠ゑ恐れ入りやす是非先生と餓鬼の親達とゝ同じ心持で無けりやァ成りやせんが責て學校で教て下さッた事を打つてなさねへ計しにでも仕てへ者だと考へて居りやそ

教員　成やどお前ゝ餘やど感心お人だ實に子供が學校へ出て居

親々たらざれゝ子々たらず

謂ふべくして行おはれざるの論

笑談

るのゝ一日の中で大抵六時間か七時間で其餘の十七時間ゝ自家に居て親達を見習ふのでドウも親達の事ゝ覺え易いから親達にシッカリして教て貰はなけりやァ困る譯サ

熊藏　先生自己の思ふにやァ今の世の中ぢやァドシ〳〵演說會でも起してランプ親父のら先に餓鬼の仕立方を一ト通り教なけりやァ迚も十分の人間に仕立る事ゝ出來ますめへと思ふが何云ふものでせう

教員　さうサ爾でも仕たら宜からうけれども中々さうも行まい……ム、最授業時間に成りましたから一寸御免

八十

㊀憐むべし妄婚の結果　憫笑生稿

憫笑生曰く私しゝ事實を田舍に取て言語ゝ東京の方言を用ひます

ガラリと格子戸を明て慌忙しく入り來りしゝ平常懇意にする甚七と云ふ男

甚七　內儀さん今日ゝ……先刻お使ひでしたさうですが今日ゝ實ァ先月からの家賃が滯はッて居るので家主から朝に晩に小八ケ間しい催促で五月蠅ッて仕方がありませんから山の神の褌やら野郎の寐間着やらを引からげて御懇意のソレ……彼の……六つ屋の上隣へ持て行て禁錮を申しつけて歸ッたら旦那からのお使ひだッて申しますから直ぐ其足で參上た譯ですが何か旨へ儲け口でも御座いますかヲ若しありますならば半口でも宜から乘て下さいましな

內儀　宿でも今までお前さんの來られるのを待て居りましたが

禁錮の期限六ケ月

松三日く僕にも意見あり

思ひ内よあれば外に出づ

一寸今出ました……ナニお前さんにお出を願ッたのハ外の事でも御座いませんが子實ハお前さんも御存じの通り家の松三(この家の息子)ハ先達て親類から彼のくらゐ意見もされるし當人も今度ハ屹度辛抱致ます改心致ますと云ッたからヨモヤ少しハ直るだらうと思ッて二三日樣子を見て居ると餘り外へ出る樣子もないから今度ハ本當に改心したかと思ッて内々喜んで居りました……

甚七　ヘエー夫ぢやア今度ハスッカリ御辛抱ですか誠に御結構で……

内儀　ナニ子夫がホンノ當座のがれで七日の晩に一寸湯に行と云ッて出て夫ッきり又三日三晩も歸らないのですよ……本當にアイツもコツも盡るぢやアありませんか

居候の卵

甚七　ヘエ夫ぢやア未だ御辛抱が出來ませんかネ……成ほど夫ぢやア御心配で御座いませう

内儀　夫から伯父が來て云ふにハサウ何時までも抛棄ッて置て段々仕方が無くなるからと云ッて金を持て行て連て歸ッて呉ましたが其逆に家へも寄せられ無いものですから當分ハ矢張り伯父の處にグヅ〳〵して居るのですが本當にお話しするのもお恥ケ敷譯で御座いますヨ……夫で昨日伯父も實家の兄も來て呉て皆の云ふにハ何時までも獨り身でおくから道樂も初めるのだからモウ相應な嫁でも取て遣たら浮氣も止むだらうと色々相談した上で其事に極ました譯ですが夫にしても何處ので見立なけりやア成らないので彼婦ゞ宜からうか此樣が宜からうかと云ッて見ましたが甚七さんなら世間も廣いし

甚七の鼻ピコ〳〵然たり

外輝然らん

又拙家の事もよく御存じだのうちお世話をお頼み申したらと妾が云ひましたら皆さんも成程甚七さんあらお心當りがあるだらうから是非お頼み申したら宜からうと云ふので夫ゆゑ今日お出を願ひました譯ですが如何でせう何處にお心當りが御座いませうか

甚七　へエ成ほど爾ですか……イヤ誰しも覺えのある事で私しあんぞも若い時にやア隨分親や親類へ色々心配をさせた事も御坐いましたが斯ランプ頭に爲てさへ薄化粧をプーンと香まして花かんざしをピラ〳〵とさして眞赤な緋縮緬の外褌か何かをチラ〳〵と見せられた日にやア歳の二十も若くなり度ありませんからねへ

内儀　串戯處ぢやアありません……

勿論

ランプ親父なる故に万事に明かあり

甚七　ナニ串戯ぢやア有ませんけれども内儀さんだッても爾でせうオギャアと生れると直に内儀さんにお成なさつたのぢやア御坐いますまい矢張り一盛りゝ何樣な風ゑたら男が氣を揉だらうか彼の羽織を着たら宜だらうかナーンて隨分人に云へあい苦勞を成さつた事もあるでせう……イヤ串戯ゝ扨おいて松三さんに細君をお迎へにあるとゝ實にお目出度事で御坐います……全体この女房と云ふ奴ゝ餘ッ程丈夫あ綱でして大概の道樂ゝ忽ち繋ぎ留ますよ男に女房のあきゝ猶家に柱なきが如しと云ひますが成やど夫に違ひありませんチ……宜しふ御坐います此ランプ親父が明日から腰辨當で見出して參りますから決して御心配あさいますあ

内儀　何分にも宜處お頼み申します

惡事千里に傳ふの意

片眼ゆ名両親い目をかけるあるべし

尚ほ色々お話しも濟み甚七い歸りまして其翌日から四方八方を駈廻り頻りに嫁をさがしても松三の放蕩い何處へも彼處へも聞えて居りまして先づ人並の處でい迎も呉やうと云ひませんので甚七親父い頭のランプへ火を附た位に熱くおつて尋ねましたが其効能が見えて誠に上等の娘を聞出しました先方い宇曾宿の和泉屋と云つて醤と味噌とを商賣して居る家で其娘の年齢い十六歳名いお花名前を聞けば大層別嬪らしいが七歳の秋に眼病を煩ちって右の目を潰したので姉妹數多ある中でも親達い別てお花を可愛がり重い物と云ッたら箸と茶碗より外よ持た事なく躾と來ちやァ女子に手習い餘計お事だ針仕事い他人にさせても用い足ると云ふので女子の爲べき業と云ッたら何一ッ教た事いないッ切併し感心お事にい角力甚九と一ッとせへ節の三味線を覺えて

劍呑な媒妁人

居るソコで甚七親父い和泉屋へ掛合ましたが先方でい累もよろしくお岩さんも跳と云ふ劣嬪だから貰人さへあれば何樣お處でも呉れ度と心配して居る處だから早速話しが整ひ甚七親父い喜び勇んで歸ッたが夜におつたので河村(松三の家)へい明日行として床に入りッ切考へますと前にも申した通りチト並の別嬪と違ッた別嬪で御坐いますからコリヤ一番考へ物だぞ正直正當に片眼と云ッちやァ迎も相談が纏まらんから何でも一ッ冒く云はおけりやァ行んムいさうだ〳〵と二人で云ッたり答へたりして居る中其夜も明ましたから早々河村へ參りまして

甚七　マア旦那も内儀さんもお喜びなさい此間お話しがありましてから毎日甲處乙處と尋ねて居りましたがドウも長し短かしで丁度似合の處もなくッて困りましたがヤットの事見當り

ました

河村　此間ゝ留主にして濟ませんでした……又嫁の事に就て御心配を掛まして……

内儀　嫁が御坐いましたか夫ゝマァありがたう御坐いました……

……ソシテ何處の何云ふ者で御坐いまそ

甚七　只今お話し致します……餘り急いで云ふと話しが間違ひますからマァ靜にお聞ください……マァ斯で御坐いますエヘン先方ゝ宇曾宿の和泉屋と云ッて盤と味噌と質が渡世ですから私しあんざァお近附にあると月に幾度となく品物を曲るのよ大層都合がよろしいのですヲ

内儀　アラいやですヨ

甚七　處で娘御ゝ年ゝ二八で花の蕾お負ゐ名前までお花で美し

味噌をつける勿れ

いし又縫針讀み書遊藝まで何から何まで能く揃ッた極上等の嫁御さんで御坐いまそが別に御異存も無けりやァ此處で確とお取極あさつてゝ如何で御坐います

と眞事と空事とを打交て語るを聞て河村夫婦ゝ大層大喜びで早速貰ふ事に定め尙は甚七ゝ双方へ周旋して程あく結納もすみ松三も自家へ引取り和泉屋の娘を嫁に貰ふ事を聞せると松公ゝお花の樣子を薄々知つて居ると見えて色々故障を云ひ立ますと両親ゝ怒り氣味でコレ松三何を云ふ親の目鏡で定たものを彼の是のと苦情を云ふとゝ定めし女郎でも根引をたい丁節だらうが夫ゝ何しても許さんと無理無体に納得させ彌々婚禮の日とあり親族緣者も寄集ひ夫々待ち受て居ると程あく甚七夫婦ゝお花を連て參りましさが例の一件ですから帽子を一割深く被らせ難く三

大安賣

松三に代て曰く目鏡で定めしに非ず耳で定めしなり

成程驚いたに違ひあからう

諺に曰く人は美目より心よ在りと故に道人ハ此罪をお花の父母に歸す

々九度も調ひ千代八千代目出度〳〵のお式も濟み艫て帽子を取た面を見ますと松公ハ驚いたコイツ一番甚七めに食せられた惡きランプ親爺と一度ハ腹も立たがヤア待て暫し急てハ事を仕損じると胸を撫て我慢して居ると松三ハ兎に角両親は良嫁を娶て早く初孫の顔が見度ものと樂んで居た處へ片眼の化物面の上お負に針仕事と云ッたら雑巾一ッ刺す事も知らず飯を炊にハ米も磨ぎないと云ふ厄介者を持込まれたので夫婦ハ大怒りトウ〳〵一週間も立ぬ中に三行半の離婚とハ是れ媒妁人の罪あるか將た嫁さんの罪ある歟

憫笑曰く嗟日本帝國三千九百万人の中二分通り即ち七百八十万人ハ先づ安心出來るとして殘る八分通りの三千百二十万の同胞よチト婚姻に氣をつけ給へ今結婚の始末を顯微鏡にかけて審査したらんにハ中々河村と和泉屋位の譯より最少し上手を越した甚だしき者あり抑も從來の媒妁人ハ山伏の再來にてもあるか無暗矢鱈と大法螺を吹き飛すのが持前で痘痕ッ面や片眼をつらまへても別嬪だ柳腰ざと云ふ成やど柳腰に違ひハ無いが然も大木で五斗搗の臼は請合あり何でも男と女を押つけさへすれバ〳〵たと思ひ無暗ニ媒介をあし又両親も肝心あ本人が得心仕ないにも拘はらず又ハ一度も話しもせず又た無理遣に押つける者世の中にハイクラもあるなり併し是も一方から云へバ自然と此處に至るべき理合もある例へバ息子殿が彼樣な女ハ嫌だ此奴ハ嫌だと云ッたのが無理にも押附て三々九度も過ると嘗たり吸附たりする樣にある事もあるからでハあるが心ある諸君ハチト此事に注意し給へト先づ僕の役目ハ是

お小言の段申し分なし

然り

でお仕舞なりサア後ハ何方でも娯(名案を出し給へ〳〵(オヤ〳〵
合點今度ハ僕が少し風變りに)トハ筆者が餘計なお世ッ介

○聞くべ〜花柳の情況　冷笑生稿

御丁寧お申し譯

日本の會席料理口に慣て旨からず此時西洋料理を食べバ例ひ二十錢の安印と雖も甚だ旨しべラ〳〵たる絹衣服も身に慣て何とも思はず此時木綿衣服を纏へバ縦ひゴッ〳〵の洗ひ張物と雖も甚だ温暖さを覺ゆるハ猶ほ粋子の新柳芳原の別嬢に飽て品川小塚原の劣嬢に戯むるゝが如し凡そ物新奇なれバ其心も亦た隨つて新奇の思ひを爲す是れ人情の常なり抔と尤もらしい小理屈をヒチクル者ハ他にあらず此處に列る諸君ハ皆通人なり學者なり筆上手なり故に其文ハ面白く其意味ハ深し之を僕の如き不粋無學の活智なしに比すれバ諸君ハ恰も日本の會席料理の如く又ベラ〳〵の絹衣服の如く僕ハ恰も安印の西洋料理の如く又ゴッゴッ木綿衣服の如し故に御馳走の中へ此粗末なる胡麻化し料理を取交て御覽よ入れるも亦た却ッて一興あらんと思ひしまバ此處に此屁痴堅き一風違ひの代物を擔ぎ出せしなり諸君幸ひに味噌の中の石として顔を顰め給ふと勿れ

富世の人にハ珍らしき謙遜

太陽ハ西に沒し鴉ハ塒に歸る頃樓丁ハ内外の掃事を爲し畢りに臨んで一掴みの鹽を門前の左右に撒ヒ鑽燧する音カチ〳〵鼠鳴する聲チッ〳〵是れ痴客を呼寄せるの延喜取なり此時娼妓ハスベタ面を眞白に塗立て寄場に屯す蓋し寄場ハ張見世の後に在り此地曾て張見世を禁せられてより以來唯寄場に在て客を待つ故に寄場ハ猶ほ東京の張見世の如きあり七八人のスベタ

寄場宜に

青臭き丈の餘計

女郎の圓鼎座を攜へてパク〳〵青臭き煙草を吸ひ閑暇に乘じてペチャクチャ〳〵各自に勝手の出放題を饒舌くる時に甲妓の乙妓に向つて

甲妓　乙妓よ昨夜の計略の成就せしや否や

乙妓　否々昨夜彼れ來るの來りと雖も彼も亦た中々の客嗇坊あれば容易に承諾せず唯不景氣の三字を以て言を蔽ふのみ然れども彼れ蓄ふる所の蠶絲を賣り兩三夜中にの再び來るべき約束あり其言信を措き難しと雖も彼の煤掃の時の例を以て推せば縱ひ約束通りにの行ざるも或の半分位の成就する目的なり

丙妓これを聞て羨み

丙妓　乙婦の好都合羨ひべし〳〵然れども當事と越中褌の兎角に向ふより脫れ易し宜しく注意せよ妾の如きの未だ一人の當

黄ふ事には先例を追ふべし

丙妓にして平氣あらず

らず偶〳〵之れあるも多くの越中褌あり刎んや此頃の毎晩毎晩お茶の挽通しをや然れども最早や移り替を爲さゞれば此の袷衣を着ての迎も向暑に敵すべからず故に樓母を賴み樓主に相談せんと欲すれども其活智あきを笑はれんを恐れ又六一屋を賴んで融通を爲さんと欲するも抵當なきに苦しむ嗚呼進退維谷まり其爲す處を知らず即ち是れ危急存亡の秋諸君よ請ふ御推文字を垂よ

痴々繰た報ひ

言未だ畢らず丁妓の嘴を容れて

丁妓　丙婦が近頃の衰態の愚妹もお察し申すと雖も万事両全を得難く浮世の常に儘ならず丙婦が若し彼の情夫に乘込ざれば何ぞこの困窮の事あらんや樂あれば苦隨ッて來り猪を食へば必らず其報ひあり是れ切た事あり之に因て之を見るときの

孤身寂歩にあらずや

悟りを開いた娼妓

妾が如き三平二滿の惚らるゝ人も無く又た惚せ呉る人もなく孤身獨歩自ら氣樂を覺えるあり戊妓これを聞き又口を尖らして

戊妓　丁姉の説所の是に似て非あり何とかれば我々の娼賣の素より立派な商賣にあらず況んや此頃の少しく自由の權利を得たるに似たれども猶未だ全く籠の鳥を免かれざるをや故に他人の面白い物の見度時又の勝手又之を見旨い物の食度ときに自由に之を食ひ樂むべき時の樂むを得べく遊ぶべき時の遊ぶを得べしと雖も我々社會の然らず人の寐べき時に寐ずして人の働らかざる時間に働らき而して其得る所の僅に十錢に滿ず豈に馬鹿々々しき次第あらずや身已にこの大苦難あり決して氣樂と云ふべからず氣樂と謂ふべからざれば其氣樂を他に

娼妓の風上に置くべからず

此の如き妓の情夫にあり度ものあり

取りて多少の保養と爲さゞるべからず而して其保養の道の何ぞと云へば唯情夫の一ッのみ彼の浦里小紫白糸の如きの此主義ありしが故に彼の大愉快を演したる者あり故に情夫の爲に心を碎き情夫の爲に貧乏するの是れ苦中の樂みのみ何の愛ひか是れあらん且つ夫れ此賤業に陷る者の情夫の有無に關せず更衣の爲に心配をあすの豈に啻に丙妓のみならんや情夫あつて心配をすると情夫おくして心配するとの孰れの是れ勝る妾の情夫の爲に心配勞苦をするに如ざるを知るあり丁姉其れ猛省する所あれよ

戊妓の丙妓の爲に頼まれもせぬ辨護を爲し一同の舌を捲の時格子の外に聲あり曰く〻と一妓立て其人の顔を覗けば則ち學校教員某あり了覺の直に表へ駈出して

了髮先生請ふ來ッて一煙を喫せ

能く先後を考へて買ふべし

娼妓の有樣い先此の如し請ふ是より藝妓に移て其一班を記せん

藝妓に二樣あり一を見番と云ひ一を樓妓と云ふ見番とい別に一家を爲し線香を以て遊客の招きに應ずる者樓妓い常に妓樓に在て樓主の使役する所と爲り娼妓と同じく揚代を以て遊客の宴に侍する者是れあり見番い線香三本を期して宴に侍し三本盡れば又た客の需めに依て三本を繼ぐ之をお直しと云ふ是い敢て東京ゐ異ある事なし樓妓い然らず素より娼妓と同じく揚代を以て一身を任せる者なれば別よお直しの期なく他の客若し來らば之を期として去り他の客若し來らざれば始終席よ在りて敢て自ら去らず故に甲客の招きに應ずるや否や又た乙客の聘するあれば先づ甲の筵に侍して後に乙の席に至るい恰かも娼妓の廻し床に於

一身を任せるとい藝お譯なり

果して然ちい藝妓い唯名ばかりなり

ると一般なり而して見番と樓妓とを論せず藝術よ至ッてい唯僅に甚九勝惚と葉唄二三とを善するのみ故よ總頭も亦其腕前に隨ッて自から廉あり概むね二十錢を以て通例と爲し偶々半助を投ずる者い郡役所の書記樣か或ひい戸長殿あり其他い皆田夫野人のみ今其田夫野人が愉快を催はすの体裁を能それば左の如し

白晝の化物

蹴髮い唐獅の如く面附い野猿の如く身にい祭禮の半天を纏ひ肩に武絞りの手拭を掛る者い近在の百助あり偶〳〵農業の閑暇に乘じて二三の糞桶仲間と割烹店に投じ胡坐を組て小酌す然れども元來粗暴の徒者來れば肴立ころに盡き酒來れば酒忽ちに飲乾す實に是れ牛飲馬食恰かも饑饉歲の施しに饑鬼の來つて嚙り附が如く餘す物い唯德利と皿鉢とのみ時よ百助原案を出して

百助　ヤア彦十ウ藝者でも呼ぶべェの

原案の通り

此註釋無くんバ其何たるを知る能はず

彦十　宜かんべェおア
又これを左右に質せバ
皆々　宜かんべェ
是に於てパチ〳〵と手を拍ち婢を呼で
百助　お前なア鈴木樓へ行て房八の阿魔ッちよを伴て來て呉ッ
しやれ
婢　ハイ畏まりました
婢ハ命に應じて直ちに鈴木樓に至り之を藝妓房八ゑ報ず
房八　お客ハ誰——
婢　彼の例も來る鴉ですヨ
鴉の語甚た解し難し想ふに鴉ハ色黑く常にカア〳〵啼て騷ぐ故
に鴉を以て田夫に比する者か既よして藝妓ハ支度を爲し（但し綿

名仙の衣服ゑ二ヶ子の半天）將に出んとす娼妓ハ之に依頼して
娼妓　お前さん今夜歸る時ゑ鴉を引張て來てお呉おさいヨ
房八　ハア宜う御座います屹度請合ました
藝妓ハ樓丁をして三味線を携へしめ徐々樓を辭し去る彼の百助
等ハ已に酩酊或ひハ自分の恍惚を吐き或ひハ村娘の美醜を論じ
座間狼籍豚小屋に異ならず時に藝妓房八入來り
房八　今日ハアリー……
アリーの一言を以て嫣然其處に現るれバ鴉連中ハ一時囂然たり
藝妓ハ先づ三味線を執て調子を合せ扨かず〳〵のお目出たや位
の坐附を謠ひ纏頭の出るを待て直ゐ甚九に移る蓋し其他を知ら
ず且つ鴉連中の御意に適へバあり是より百助謠へバ彦十ハ皿を
叩いて之に和し彦十謠ひ畢らず次郎又た發し太郎作又踊る一曲

挨拶ハ本場の藝妓に讓らず

實況寫し得て妙あり

人一化九と改めて如何

自笑居士曰く僕之を保証せず

一諸都て三味線の調子に合ず他よりこれを聴けば恰かも煤、播の混雑に似たり不粋も亦た甚だしからずや既にして藝妓い彼等の十分に狂乱せしを覗ひ誘ふに一夜の愉快を以てす彼の百助等も素より其意あれば敢て不可を言はず直ちに藝妓に誘はれ人三化七然と して割烹店を出去る

骨皮道人曰く本論頗る妙、田舎花柳の有様を寫眞に撮て見るが如し然れども只登樓の事なきと以て遺憾と爲す因て道人が曾て田舎に在し時其實況を詠じたる狂詩あり今これを飜譯して以て惡まれ者の仲間入を爲すと云ふ

何縣何郡何々驛。花柳の様子茲よ釋ん。所替れば品替る譬への通り。隨分又た奇妙の癖あり。諸君一ッ先づお聞を願ふ。決して虚言八百を云ふに非ず。娼妓い別段違はずと雖も。買者い大抵芋堀客。太陽顔

を隠す。暮六の時。徐々出掛る若衆連。休裁未だ脱せず野蠻の風。面附恰も化物然たり。女郎買平か堂仕平。大道の眞中相談專ら。此時賛成い過半數。頭割の勘定原案全し。又見る一夜の旅泊人。退屈ゐ堪兼て神を慰せんと欲す。袖摺り逢も亦た多少の縁。法螺を吹て仲間を募る頻あり。膳の上一寸一合を傾むけ。微醉機嫌宿を出る辰。元是れ素見半分の戯れ。敢て目的の別嬪あるに非らず。是等の隊長皆繰出し。或い茶屋に掛り或ひい又振り。一人の豫算五十錢算盤の取方中中辛し。頓々上り込む段梯子。先づ樓母と對面始まる。初會か馴染か撿査の後。敵娼顔を揃へて此に並ぶ。名指初會又た馴染。名々頭相當の妓を定む。而して後運び來る臺と酒と。器物が八分正味い二分。一杯飲ば酒已に盡き。一箸食へば肴又た無い。臺酒の直段い二十錢宛。一寸安きに似て却ッて高し。去り乍ら毒を食べば皿までの災ひ。忽ち

樂み其中にあり

都鄙一徹

氣違ひ了簡を起し來る。德利一本又た一本。替り臺一枚又た一枚。盃日の腹痛みゝ頓と精はず。大盡氣取の大散財。敵娼の勸めに依て藝妓を揚げ。飲や謠へや騷動催ゝす。出呂連の節祭文に擬し。目出度の聲万歳を學ぶ。甲助の樣子面鬼の如く。乙平の甚九響き雷に似たり。悩むべし藝妓ゝ甚だ迷惑。三味線曾くも息むべからず。廿錢の纏頭糞燒紛れ。撥當り放題上邊を飾る。痴々客々調子高く。一ッ歌幾度か繰返し謠ふ。當附け文句悟る者なく。唯妙々と云ッて譽詞罷すし。其中最早十二時。杯盤を歛めて寐座に入る期。寐床ゝ廻し床部屋に非す。一室五人懲役の姿。夜具ゝ半風保証し難し。か貧に臭氣鼻ゝ向ッて吹く。然りと雖と皆是れ習慣の客。半風臭氣屁とも思はず。夫より又た別段の樂みあり。少々妨げあり茲に記せず。登樓の体裁畧此の如し。其他ゝ大抵推して知るべし。

雷に似たれども ゴロ寐の客にゝ非ず

臭氣を屁と思はざれば屁も亦た屁と思はず

○改むべし猥褻の俗謠

強笑生稿

胴魔聲を出して唄ふ都々一

惚てゐれられて惚られて惚て、惚て惚らりやァ猶惚る……か

星　オイ佐藤君ヤ……君やァ何で其樣な猥褻な謠を唄ふのぢ

やい

佐藤　又君やァ屁痴六ケ敷小理屈を云ふのかい……僕ア何よも猥褻な謠ゝ歌やせんぢや今僕が謠ふたのゝ昨夜那樓の愛婦が傳習して呉た愛情を含んだ實ょ高尚な好此を温習したのぢやがヤ……ヂヤが若しこの歌を猥褻と思ふなら那の愛婦を責て呉エ決して僕の罪でゝ無いぢや

星　又ァ恍惚を言ふのかい止やァ面白くすない……成る程君

の云ふ通り好此チウもなァ東京で云ふ都々一も同じもんで元ん高尚な優美の歌ぢやッたに違ひないぢやが夫が近頃に成つて其高尚優美の味ひも何處へ行て仕舞たやら皆な聞に堪られない文句ばかしに成つて仕舞たぢや……夫で僕ァ如何かして此俗謠を改良したいと思ふて此頃俗謠改良論チウものを書掛て居るのぢやが君に一通り讀で聞さうかい

佐藤　ム、何樣な事を書たか讀で聞せェ……どうせ君の文ぢやでタカの知れた論ぢやらうけんど

星　其樣な事を云ふな……此誤迷論を聞て驚くなヨ……

佐藤　ホラ是ぢやエヘン

星　ンエヘンと咳拂ひして讀はじめたる文章

嗚呼甚だしい哉俗謠の卑猥に陷るや

語苦勞樣

佐藤の言自ら評語なる類を以て集ひ

佐藤　人評に曰く突如として起る是れ老成の人に非ずんば能はざる所……

……かくへを入るなや……エヘン

星　ア其樣にちやくへを入るなや……エヘン

佐藤　ム、咳拂ひが止手ぢや

星　ハテア默止て居れや……

ふ所の歌曲を聽け……

……請ふ試みに彼の三味線に合せて謠

佐藤　さうよ聽と面白いよ

星　困るよ默止て居れヨ……長唄、常盤津、義太夫、清元、富元、新內、岸澤、歌澤、大津繪、都々一、端唄、伊豫節、一中節、等其種類ハ一々枚擧するに遑あらず而して此中にハ義理人情を穿ち得たる者も無きにハ非ずと雖も唯是れ一二を見るのみにして其他ハ概ね猥褻に渉り親子兄弟姉妹同坐して之を聽くべ殆んど耳を掩はし

アハヽヽ

沈倫する者を何が故に浮氣と唱ふや

ひるの甚だしき者あり

佐藤　虚言ヲ云へ三味線を聽のに耳を塞いで居るものが何處に

あるかい

星　其樣に理屈を云ふあよ是い一寸例へぢやがヤ

佐藤　例へおらヤア宜ッ夫から跡を讀んで見ろや……

星　讀けんどチト默止て居て呉んぢや困るがや

佐藤　モウ默止て居る……默止て居るぢやで早く讀めー

星い又た前文に繼で

星　耳を掩はしむるの甚だしき者あり爲めに世の風俗を紊亂し我同胞ある善男善女をして煩腦の淵に沈倫せしめ惡魔の仲間入を爲さしむるい豈に嘆ぜべきの至りあらずや苟くも志しある人いこの鄭衛の曲と猥褻の謠にい決して近寄べからざる者

擅着にあらず横着なり

其れ然り豈に夫れ然らんや

あるに

佐藤　夫やア君――自家擅着ぢやッ……此間彼婦が唄ふたら君も一所に爲て謠ふたぢやあいかい

星　君ア默止て居るチウたに未だ其樣な事を云ふのかい

佐藤　ムヽモウ何にも云はん……默止て居るぢやで早く讀ー

星　近來い晉に田舍の下等社會のみならず或ひい上流に位する者までこれと好みこれを愛し宴會とし云へば必らず此曲と此唄とを聞ざるいなく甚だしきに至ついい正々堂々たる儀式の席までも之を用ゆる抔い實に驚くべきの次第あらずや

佐藤　ヒヤーヒヤ……舉て遣たのぢやッ

星　舉て呉んでも宜ケに靜にして聽て呉や……夫我日本い此の如き有樣なるを以て如何ある學校を設けて善良の教育を施

評者も曰くナヽナールほど

評者も曰く誤迷論

さんと欲するも豈に完全の結果を得べけんや

佐藤　ナヽナール程

星　又見よ少しく小都會を爲すの處に於てハ天よも地にも替難き最愛の女子をして學問盛りの年頃にも拘はらず此鄭衛の曲と猥褻の謠とに貴重なる金と時間とを費やして之を稽古させる如きもの夥多あるハ抑〳〵何事ぞや是れ實に善良の女子を驅て淫奔ゑ勸誘せしむる者と謂ふべし

佐藤　如何にも誤迷論ぢや

星　又かい……故に余ハ彼の所謂遊藝師匠なる者の戸前を過る毎に「帶と解れて其儘に」との或ひハ「互ひに肌に抱きつき」あと唄ひ敎るを聞き人の前にて演ずるも敢て恥とも何とも思はざるが如き慣習を增進せしむるを嘆せざるハ非ざるなり

百十

熱を欲するが故に熱心と云ふ

亭主食ふのスキハ眞平

佐藤　モウ濟だか未かア

星　未だ〳〵まだ長いヅ……夫れ此世間幾多の人にして我兒ある者ハ如何にもして此兒を正しき人間にせんものと願はざる者ハ無かるべし夫れ之を願ひながら却ッて淫奔に流るゝの敎育を施すとハ所謂熱を欲して氷ゑ就と何ぞ異ならんや故に余ハ此俗謠を改良するの第一着として先づ世の貴孃令妹に向つて彼の猥褻なる戲曲を好まざるやう忠告し又現に女子ある人に向つて其最愛の女子をして淫奔の稽古場に入れ彼の不正極まる猥褻の戲曲の指南を受しむる樣の事なくして宜しく智德体の正當なる三育を受しめ貞淑の志氣を養成せしむる樣にせられん事を希望するなり……マア一寸大意ハ此樣なものぢやがドウぢやらう……ヱヽ佐藤君どうぢやらう

佐藤　默止て居れナウたで默止て居るのぢやがや

星　困つた男ぢやノウ讀で仕舞たら何とか云ふて呉や……宜

とか惡いとか

佐藤　夫ぢやァ宜ナウて譽て遣ら……チャが其文い全体誰が

書たのぢやい

星　誰がナウて聞までもあい僕が書たのだやがや何でさう云ふ

のぢや

佐藤　何ナウて君に去ちやァ出來が宜過ぎるからぢや

星　失敬な事を云ふな是が全備したら一時社會を驚かせるゾ

佐藤　さうぢやらう何ぢややら了解らん寐言ぢやで人が驚くぢ

やらうァハ、ハ、ハ時になァ君昨夜約した事い必らず晩まで

に果して呉や……僕ァ今日三時頃から例の近道を行て待ち

挨拶に困る

案する處金策あらんか

よるで……宜か君ー屹度賴んだゾ

星　宜とも慥に承知した……夫で僕アモウ改良

佐藤　夫やァ何の事ちやい

星　君も不粹ぢやなァ……歸らうナウ酒落ぢやがや

○備ふべし不時の金穀　長笑生稿

六疊の坐敷に一人の隱居が茶を入て呑ながら眼鏡に掛て一枚の新聞紙を廣げ何やら思案顏の處へ入り來りし一人の男い平常懇意な仲と見えて遠慮の無い言葉遣ひ

男　御隱居さん今日い……

隱居　ム、誰かと思ふたら仙藏どのかァ上ッて茶でも呑が宜

仙藏　ドウモ御隱居さんなんざァ結構な御身分ぢやなァ……何程

茶呑相手い欲しからずや

公債証書をタント持て隠居するハアも古いかく

清國ハ殆んど貧國に擬せんとす

米が高ふ成ても世間が不景氣でも毎日〳〵斯して菜でも呑で新聞を讀でアヽ宜御身分ぢや……然して其新聞にハ何か面白い事でも有りますかいな

隠居　別段面白い事もないけれど茲に支那の饑饉の事が書てあるが實に讀でも慄然とする程ぢやァ

仙藏　へー支那の饑饉が……夫れや何樣な事で御坐いますか

隠居　讀で聞せやうかい先づ斯樣な事ぢや……エヽ清國山東省の饑饉と……エヽ清國山東黄河の東北地方饑饉の狀況ハ〳〵窮苦を加へて益々慘狀に陷り春以來頼みに思ひし麥も其後一滴の雨も降らず土地ハ灰の如く燥きたる處へ俄ゑ大雨に遇ひ麥ハ泥に埋もれて枯れ又黍の如きも幹のみ丈夫なれども葉の附根へ泥砂飛び入りて漸々に枯れ遂に枯盡すに至れり故に山間の樹皮原野の草根にして口腹を滿すに足るべきものハ皆食ひ盡して復さ一物とも餘さず實に飢饉の極度に達したる者の如し右窮民救助のため同國在留の各國人より義捐せし金高も既に二十万兩の巨額に達したりしが同國の地方官も默視するの秋にあらざるを察し山東巡撫張曜氏ハ戸部に奏請して銀十万兩を得この内先づ五万兩を散じ盛京省内より粟黍等を買入んとせしに同省も昨年秋實不熟の爲め曩に穀物を他の地方へ賣り出す事を禁止せられたるを以て其需めに應じて賣出すものなきに依り張曜氏ハ其筋に請求して救恤用に限り特に同省内より賣出す事を許るされたり又た芝罘道臺ハ汽船廣濟號を牛莊に廻し是又た穀物の買入に走奔ゑたりしも同地方凶歉の恐れありとて容易に賣出さゝるに依り種々手を盡して遂

河東凶なれバ其民を河内に移すべし

に粟黍取交五万斛を賣り出す事にありたりと又た聞所によれば近日上諭を以て其災害の尤も太甚しき河東諸府縣七千八百八十一村より今年春季に於て徵收すべき租稅を秋季出來作まで延期せらるゝ筈ありと……どうぢや大變騒ぎぢやらう

仙藏　へー何ぢややら聞ても碌に分りませんが大變騒ぎらしう御座いますよあァ

隱居　夫から此新聞にまだ此樣な事があるぢや……此頃清國山東省の地方を旅行した人の話しを云ふを聞に實に聞ても怖然とする程の次第なり或日其旅宿の門前でガヤ〳〵云ふ人聲するに何事ならんと出て見れば一人の餓疲れたる男ありてヨロ〳〵と歩みて來りしが忽ち其處に打倒れたりスルと傍よ居りし一人の男ハそれを見て矢庭に前の男の股に食つき未だ生て居る者の肉を食取り口の周りを血だらけにして舌舐ずりして居たり往來の者も此を見て驚き恐れ四方へ逃散て誰一人叱り禁る者も無かりしと云ふ又た往來の四角に立て養込〳〵と呼んで肉を賣る者あり其肉ハ馬とも牛とも附ぬ怪しき物なれど誰も此肉ハ何の肉なるやを問ふ者もなく皆寄ッて集つて舌打をして腹の飢を凌ぐと云ふ然るに或人ハ不審の餘りに其肉賣の跡を跟て彼が家に行て見たるに家の中にハ死人の山を爲し彼處の隅にハ骨があり此方の隅にハ腕がありて恰も黑塚の納戸大江山の臺所の如き有樣あれば肝を潰して逃歸り跡にて聞ば是ハ皆な今息を引取らうと云ふ飢人を引摺來りて未だ呼吸のある中に擂漬にし蓄はへ置て人肉鍋にして賣る者のよし實に聞も恐ろしき話しならずや

粟ァ食ふとハ即ち此時

話し半分に聞くおかれ

若し之に手を出せば已れも其お相伴を食へばあり

死人に口なし唯骨と腕とあるのみ

日本にも亦た我娘を食ひ物にする者もあり

仙藏　大變恐ろしい事で御坐いますあァ全体何様に困つたチウても人間が人間の肉を食ふチウ事がありませうかあァ

隱居　日本でハ餘り無いことぢやが彼國でハ隨分あると見えるぢや昔し隋の煬帝チウ天子の家來ゑ麻叔謀チウ者があつて此者ハ小兒の肉を好んで竊かに民家の小兒を竊みこれを蒸して食ふたチウ事もあるし又た水滸傳にハ十字波の張青夫婦が旅人を殺して其肉を饅頭にして賣つたチウ事も書てあるぢやで今の人肉を食ふチウ事もあケさうに思はれるぢや

仙藏　ヘー恐ろしい事ぢやあァ……夫のら見ると私しあんぞハ貧乏ぢやの何ぢやのと云ふても眞逆に人に食はれるチウ心配もあしァ結構なものぢや

隱居　さうぢや縱ひ鬻でも雜炊でも人並に食ふて居るのハ結構ぢや……結構ぢやけれど此飢饉チウものハ外の國にばかしあると極つて居る者でハない日本ぢやとて何時此樣な事があるまいにも限らないぢやで平常に能く氣を附て置んぢやあらん一体飢饉チウものハ支那や朝鮮で受持て居るやうに思ふて支那が飢饉ぢやの朝鮮が飢饉ぢやのと聞ても川向ふの火事のやうに思ふて居る者が世間にハ隨分あるやうぢやが是は甚だ心得違ひぢや今も云ふ通り飢饉ハ只外國にばかし居る者と極つても居らん何れ其中にハ日本へも巡廻して來てマサカ本籍も置まいけれど寄留籍位ハ持て來るかも知れんぢやト云ふと不吉のやうぢやが不吉でも仕方がない昔しからの跡に附て考へても迚も免れる事ハ出來んぢやト云ふたゞ入んお世話ぢや夫ハ無益ぢ心配ぢや何も飢饉から何時日本へ行くチウて

轉ばぬ前に杖を突き雨の降らざる前に足駄の鼻緒を直し置の意あり

謹聽々々

無ッさうに見ゑても有る者ハ借金ぢや

郵便を寄越た譯でもなし又好んバ少しばかしの飢饉があうたに仕た處が日本國中ゐハ食糧が澤山ある又世界ゐハ慈善家もあるチウ人もあるぢやらうが是が文た了簡違ひぢや……成ほど日本も外面から見るチウと食糧も金錢も山のやうに有るやうぢやが扨てありさうに見えても無いものハ金チウ譬の通りぢや又他所の家に腐るほど金があつても自分の役にハ些とも成らん……夫ぢやで慈善家の義捐ハ當になる者ぢやあし況て外國の人のら貰ふチウやうな腐ッた魂性あら寧そ今の中に首でも縊て死んで仕舞ふた方が宜ぢや……夫ぢやで儉約と貯蓄とをして不時の備へが大切ぢやチウて政府からも度々お諭しがあつても未だ夫ほどに儉約の實も見えず貯蓄も澤山出來たとハ思はれんが一体儉約ぢやの貯蓄ぢやのチウ事ハ他

贊成々々

吝嗇と誤解する勿れ

出來難くして出來るの丶貯金出來易くして出來難きも亦た貯金

人に云はれた位でハ中々出來んものでも自分から爲あけりや成らんチウ心持に成らんけりや出來んものぢや……前云ふた支那のやうに頭の上へブラ下るとヨが覺るが頭の上へブラ下つて來てからナンボ酒が酒を飲せられた樣に七轉八倒しても俄に貯蓄ハ出來んぢやで今から平常に氣を附て成る丈活計向を約やかにして驕りハ止んけりや行ん……約やかにするチウても三度食ふべき飯を二度にして一度分を貯へる譯にハ行んが例へバ商人あら儲けの金の中から貯へ百姓あら穀物あり錢ありと貯へるやうにすれバ塵も積れバ山で少しヅヽでも大層高にあるものぢや早い話しが一日に一厘ヅヽ貯蓄しても一年にハ三十六錢五厘十年立バ無利子でも三圓六十五錢何ぢやか餘り些少のやうぢやが日本國中三千九百万の人が一

日一厘宛貯へると一億四千二百三十五万圓の大金となるぢや

仙藏　へー大層事になる者で御坐いますあァ

隱居　話しが了解つたらお前も是から精出して貯蓄して不時の備へをして置が宜決して他人の事でハ無いぢや

○見るべし珍らしき祭禮　買笑生　稿

今度知己の粹子連が田舍の事を一題ヅヽ思ひ〳〵に娯名筆を揮はれるチウ事に付て買笑にも何か書よとの役割おれど買笑ハ元來田舍の事情にハ誠に暗き男ゆゑドウしたら宜かんべエ是丈ハドウか免して呉ッしやれと兄達に云ッてハ見たが何ッても夫やァ無益だから何でも二三枚書へとの嚴命に止むを得ず曾て目擊せし武藏の大國魂祭の實況を記して未ゞ御存じ

ノウ〳〵

自分の事ハ自分で保証するに如ず

あき人々のお笑ひ草とする事とハなれり但し是ハ虚言僞りにハ非ざるゆゑ諸君そのお積りで……

甲州街道の中繁華を以て鳴るものを八王子と爲ゝ之に亞ものハ即ち府中驛にして東京日本橋を距る事凡ろ八里亦た田間の小繁華地あり此驛の中央に一大社あり大國魂神社と稱す官幣小社たり毎年五月五日其の祭典を施行す俗に之を六社祭と稱し又た蚕祭出逢祭と云ふ往古より有名の祭禮にして關東八州ハ云ふにおよばず全國中其比を見ざる所也ゝに遠きハ兩野二總および相房等の諸州より集り近きハ近郡諸村より會す是を以て祭禮の當日ハ一驛中人の山を築き車馬の往來を止む蓋し時の上景氣と不景氣とにハ拘はらざるあり

註に曰く兩野ハ上野下野二總ハ上總下總相房ハ相摸と安房なり

○一錢劇場　評判〳〵〳〵サァ入ッしやい〳〵見るハ一時

已れも只の鼠ぢや有るめへ

話しゝ万古末代これゝ北海道ゝ倫敦の國巴理斯の都から船來ましたる處の六本足の大鼠で御座い……油揚を見せれバコンコンと鳴き小判を見せれバニヤン〳〵と飛で來る奇妙奇手列あ化物で御座い……サア入ッしやい〳〵大人が一錢お子供衆が五厘代金ゝ見てのお歸へりで宜しいト皺枯聲を出して一生懸命に客を招く、一老人小兒を伴ふて其言を聞き且つ其看板を見て以爲らく我ゝ年己に七十あれども未だ嘗て六本足の鼠を見ず是れ子孫に對して深く恥る所請ふ一見を試み以て百聞に代んと乃ち一錢五厘を拋ち小兒を伴ふて其場に入り之を見れバ豈に料らんや尋常普通の鼠あり老人因て興行主に問ふて曰くお前樣ア六本足の鼠だァと云はァしやッたに我等のハア目で見ると矢張り足ゝ四本しかありませしねへが是やァハア何したもんだんべェ

見るも亦た一笑の恥

興行主低聲に曰く此奴ア失敗た足を附るのを忘れた哩と老人これを聞て愕然たり

大人にして見る者も天保なり

右の方にゝ曰くお寺さんゝ駒込の吉祥寺……サア〳〵お子供衆のお樂み僅に八厘で御坐いと左の方にゝ曰く是ゝ西鄕隆盛が兵を繰り出す處から田原坂の大戰爭から隆盛が討死する處まで事細に早取器械を以て實際を寫シ取ましたる處の大寫眞初めから終りまで見て代金ゝ僅か一錢……

猶作者の法螺もあり

其他猿芝居あり洋犬の手踊あり小男あり大女あり前抜あり早接あり吹矢あり獨樂回しあり何もあり蚊もあり色々樣々種々雜多の一錢劇場ゝ處々に充滿す太皷ドン〳〵三味線チン〳〵法螺の貝ブウ〳〵柝木カチ〳〵殆んど人耳をして聾せしむ中に盆倉漢あり大口を開き看板を見且つ効能に驚き一見を試みんと欲して

錢を懐中に探れば財布ハ羽根ヲ生じて何れの處にか飛去る是に於てか懸一憑探一探狼狽特に甚だし傍人これを見て氣の毒に堪ず乃ち之に謂て曰く夫やァお前さん書鳶に遭れたんだらう盆倉漢ハ涙を溢しながら天を仰で曰く畫鳶ハ何處へ飛で行たんべエ

○旅籠屋　遠くより來る者ハ男女老若共に先づ旅籠屋ヲ投ぜ故にこの日雜沓を極めるハ旅籠屋を第一とす此驛中に旅泊を以て業と爲す者ハ十餘軒ありと雖も悉く旅客充滿して寸地を餘さず八疊の坐敷に客を押込ると凡ろ五六十人貴賤混合男女同席恰も芋を洗ふが如く腕を張れば腕腮を突き足を伸せば足頭を打つ强き者ハ威張て臥し弱き者ハ身を縮めて座す而して旅客の出入ハ素より勝手次第にして宿泊料ハ皆前拂ひあり

若者三四人あり室内別に一團結を爲す其同室の人大抵田舍の芋

弱ハ强の爲に壓せらる豈に啻に此旅客のみならんや

旅客浮世ハ色と酒

坂連あるを輕蔑し足を伸し腕を張り言語麤豪起居豪落猛虎も猶ほ怖れざるの勢ひあり是れ問はずして知る東京にばり〳〵たる職人連なるを甲曰く我曾てこれを聞く此宿の祭禮ハ出逢祭りにして今夜ハ別嬪とあく三平二滿となく誰でも彼でも見る者觸る者其袖を率ば必らず應ずと云ふ今夜ハ此の如き雜踏あれば迎も安眠を得難しヤイ〻弟自已に同意して其實際を試みてハ如何ん

乙曰く自已も亦た其意あり縱ひ赤耻を洒すも所謂旅の耻ハ搔

丁寧なる辨護

於あり繰出すべし〳〵と戸外に出で去る

道人曰く昔し舊幕の時代ハ頗る猥褻にてありしも明治の今日ハ其弊風を一洗して更に其跡なし然れども世間にハ猶猥褻を以て稱する者あるゆゑに本文の若い者右の言を吐くなり

○妓樓　球燈幾百悉く妓の名前を現し樓上樓下より以て座敷臺

金を儲ける酒肴（趣向）

蜘の如き故苦もなく引張り揚るなり

所に至るまで處として之を點せざるゝ無く煌々として白晝を欺むく者ゝ妓樓なり此夜豫じめ多客を期するが故に揚代ゝ平生に二倍し酒肴も亦たこれに準ず是を以て氣の利たる者ゝ素通りして顧みず唯此に遊ぶものゝ鼻下長連が敵娼の手管に釣れる者か然らざれば其樣子を知らざる者とのみ樓前に近村の兄ァ達五六人あり立て互ひに恍惚を吐く甲曰く彼の何妓と記する提燈ゝ我が買ふて以て與ふる所その美にして且つ艶あるゝ衆に秀るにあらずや乙曰く彼の某々と書するゝ我が奮發せしあり其返照の明かあるゝ他を壓するにあらずやと流涎三尺鼻下三寸共に俱に誇り顏を爲す時に妓夫ゝ早くも其鼻下長の兄ァ達を認めて一も二もなく之を樓上に誘なふ其狀ゝ恰かも蜘の虫を捕ふが如し亦た笑ふべきあり

妓夫ゝ挨拶に出つてゞウ

客も皆總ゞナを垂る

一室三四客あり頻に手を拍て敵娼を呼ぶと雖も敵娼ゝ繁忙ゆ托付て中々至らず妓夫代つて謝して曰く今夜ゝ非常の多客あり故に衆妓ゝ兩脚を摺木にすると雖も一々其義務を果し難し待遇の粗漏請ふ恕せよ請ふ恕せよ客曰く我れ汝ぢを責るも益なし請ふ敵娼を呼び來れと猛威烈火の如くにして敵すべからず依て之を敵娼に告ぐ敵娼ゝ五月蠅ねへと云ひながら坐敷に入來つて曰く郎君等ゝ何の用かある今夜の多忙ゝ郎君等も亦た豫じめ知る所に非ずや然るに甚助を起し否な妾を幕ふが爲ゆ屢〳〵樓下を煩はせお察しおきも亦た甚だしからずや客曰く居れ我れ汝ぢに語らん抑〳〵我等の今夜此樓に登るゝ數日前の約束に在り而して今夜來るや否や汝ぢ總花を需む我以爲らく成ほど一年一度の祭日なれば綺羅を張んと欲するも亦た宜なりと其需めに聽じて總

花の札を掲しに非ずや又た酒を呼び肴を運べば汝ぢ藝者を掲よと勧む我以爲らく是れ亦た一年一度の物日なれば景氣を示さんと欲するも亦た宜ありと其勧めに應じて而も二名の藝者を呼しに非ずや然るに藝者は僅に五六分間にして早く已に此席を避け又た敵娼は三日月様は愚あり二日月位にして少しも顔を出さず剩さへ勘定は平生に二三倍して已に之を奪ふ何ぞ不人情の甚だしきや妓曰く妾何ぞ不人情を好まん然れども非常の繁忙にして唯樓上樓下を奔走するのみ願はくは今夜の罪これを不問に措て可なり他日復た郎の深情に報ゆる所あらんと痴客これを聞て忽ちグニャ〳〵然として曰く今夜の雑踏迎も快味を覺え難し寧ろ他日を期して安然快を買ふに如ずと妓曰くどうぞさうして下さい本當に濟ないねへと客曰く二三日の中必らず來るべしと共に

三十日の月に非ざれば可あり

グニャ〳〵汝ぢを奈何せん

紋切形

樓を辭し去る樓を出るに及んで某々等の敵娼は悉く出來り戸外に送って曰くお近い中に……目送舌を出して曰く人を馬鹿にして居やアがる

○お太皷講　淺黄の半天脊中に赤色を以て祭りの一字を記し紺の股引を穿つ者は太皷敲きあり皆是れ一騎當千の若い衆にして常に講社を結ぶ其人百を以て算ふべし之をお太皷講と云ふ此お太皷講ある者は別に是と云ふ功能あきが如しと雖も元來神輿の道筋を拂ふに始まると云ふ其太皷は圓經七八尺にして容易の力を以て之を鳴すべからず故にこれを鳴す者は是が爲め四五日間は職業を休むに至る或人の曰く此太皷講の人々は自腹を切て衣服其他を新調し又た多少の小遣ひ錢を遣ひお負に終日終夜大太皷を敲いて四五日も我職業を休むとは實に物好あらぬやと余曰

作者自評

くナール程

○神輿　神輿ハ八臺あり昇丁各〳〵白衣を穿ち帽子を戴く是れ亦た講社に出づ而して神輿の出るハ午前三時頃にして先づ之を御旅所に遷し又た種々の儀式を施行すると凡そ一時間許り此儀式畢つて而る後に神輿を驛内に出す是れ例あり此御旅所に遷るときハ戸中および其他の燈火を悉く消す是れ亦た例あり是を以て神輿の本社を出るよ及んでハ家々戸を閉ぢ數万の燈火一時にこれを滅す故に此時や白晝の如き明々も忽ち變じて暗夜の眞黑と爲り喧々囂々も忽ち變じて寂々寥々とあり唯暗黑中に奏樂の聲と鉄棒の音を聞くのみ亦た奇ならずや蓋し御旅所ハ本社を距る凡六七町の處に在り而して神輿御旅所に遷れバ戸々の點燈舊に復し暗夜忽ち白晝と爲り寂々忽ち喧々と爲る其有樣ハ筆端に

出逢祭の名是より出づ

其處に口傳あり

盡すべからず然り而して御旅所の儀式終るや否や神輿ハ整列して門を出づ此時に及んで待ち衆たる野痴馬連ハ直ちよ神輿に飛附てこれを昇ぐ或ひハ右往するあり或ひハ左行するありヤッヨィ〳〵の聲ハ天よ響き地を動かし且つ神輿の前後左右ハ一臺毎に數百の高張り提燈を掲げて煌々之を照し一往一來甲走り乙止まり丙去り丁來り來往數十回旭日東嶺に上るに及んで之を本社に納め祭典全たく畢る實に天下無比の祭禮よして亦た天下無比の奇觀なり

天に響き地を動かすハ支那風の法螺

合作笑説　田舍摸樣　終

版權登錄 百三十四

明治廿二年九月廿日印刷
同 年十月二日出版

定價金參拾錢

發行者 京橋區銀座二丁目六番地 千葉茂三郎

印刷者 京橋區銀座二丁目十二番地 宮本敦

發行所 京橋區銀座二丁目六番地 共隆社

版權所有